



公益社団法人日本環境教育フォーラム

清里ミーティング2013

報告書

日 時：2013年11月16日(土)～18日(月)
場 所：公益財団法人キープ協会 清泉寮
山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
主 催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
後 援：環境省、文部科学省、国土交通省、経済産業省、
林野庁、山梨県、日本環境教育学会
協 賛：アサヒビール株式会社、
株式会社伊藤園、
NTTジーピー・エコ株式会社、
J-POWER電源開発株式会社、
公益財団法人損保ジャパン環境財団、
株式会社日能研

参加者：203名



公益社団法人日本環境教育フォーラム
清里ミーティング 2013

目次

開催趣意	1
スケジュール	2
清里ミーティング これまでの実績	3
1日目 開会式・全体会1	
開会式	9
全体会1	
キーノートスピーチ	11
ワールドカフェ方式・ディスカッション	13
2日目 3時間ワークショップ	20
全体会2	
「環境教育に関わる諸団体から最新のメッセージを聞く」	35
オプションプログラム	
環境教育プレゼンテーション	42
早朝ワークショップ	47
当日募集ワークショップ	48
特別企画・自主企画	51
3日目 全体会3・閉会式	52

開催趣意

今年で通算27回目となる「公益社団法人日本環境教育フォーラム清里ミーティング2013」を、今年も11月16日(土)～18日(月)の3日間にわたり、公益財団法人キープ協会清泉寮・山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを会場に開催した。

このミーティングは、主に以下の2点を全体のテーマとした。

1. 参加者同士のネットワークの構築
2. それぞれの環境教育活動を再確認し、理念や意識を共有する場

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取り組みの一環として環境教育がある。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切である。

そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人（または団体）がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要である。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPO など環境教育の現場で働く人々同士のつながり＝ネットワークを大切にし、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えている。

そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、本ミーティングを開催した。

清里ミーティングの特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者の皆様が“主役”であること。

どんなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体でつくり上げていくという性格を持っていること。

今年の特徴

2013年の大きな特徴としてはメインテーマを設けず開催したところにある。参加者の皆様が、より主体的に動くことが出来る場を設けるため、このような形とした。

更に、今年は、以下の通り昨年までとの違いが4点ある。

1. 更なる参加者間の交流を重視
開会式の後に行う全体会では、ゲストによるキーノートスピーチの後、参加者全員によるワールドカフェ方式・ディスカッションを取り入れた。初日の開会直後から参加者同士が交流し、より活発な意見交換を行えるようにした。
2. ワークショップの実施時間を濃縮
例年3.5時間で実施されていたワークショップを3時間に濃縮した。移動時間や昼食時間、頭の整理のための自由時間をゆったりととることができるように配慮した。
3. プレゼンテーションの相互評価
15分で実施されていた「環境教育プレゼンテーション」を「10分プレゼンテーション」に変更、大会場にて同時進行した。プレゼンテーションの後には、聴講者からその場で率直な意見やコメントを記入してもらい、実施に対する評価を受けられるようにした。
4. 情報交換会の促進
夜の情報交換会では、初参加者の皆様が参加しやすい工夫を加えた。更に“話したいテーマ”・“会いたい人”を参加者の皆様から聞き、ご案内する「コンシェルジュデスク」の機能を充実させた。

スケジュール

●1日目：11月16日（土）

10:30～	受付開始
11:30～12:15	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画（自由参加）
13:00～15:30	開会式 全体会1 <ul style="list-style-type: none">●キーノートスピーチ●全体会テーマ【私の環境教育トレンド・キーワード】 ワールドカフェ方式・ディスカッション
15:30～16:20	休憩・チェックイン
16:20～18:30	10分プレゼンテーション
18:30～20:30	夕食・休憩
20:30～	情報交換会 <ul style="list-style-type: none">●「人と組織の紹介処（コンシェルジュデスク）」開設●人材・仕事探しのお手伝い「oh 人事」コーナー開設●アクアマリンふくしま移動水族館OPEN（21:00～22:00）

●2日目：11月17日（日）

7:00～ 8:00	早朝ワークショップ（自由参加）
7:30～ 9:00	朝食・移動
9:00～12:00	3時間ワークショップ 午前の部（昼食含む）
12:00～13:30	休憩・移動 <ul style="list-style-type: none">●アクアマリンふくしま移動水族館OPEN●レクリエーション実施
13:30～16:30	3時間ワークショップ 午後の部
16:30～17:00	移動
17:00～18:30	全体会2 <ul style="list-style-type: none">●環境教育に関わる諸団体から最新のメッセージを聞く 環境省環境教育推進室 / 経団連自然保護協議会 / 日本環境教育学会 「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 / 自然体験活動推進協議会 日本エコツーリズムセンター / 日本環境教育フォーラム / 日本GEMSセンター 米国からのゲストスピーチ など
18:30～20:30	夕食・休憩
20:30～	情報交換会 <ul style="list-style-type: none">●「人と組織の紹介処（コンシェルジュデスク）」開設●人材・仕事探しのお手伝い「oh 人事」コーナー開設

●3日目：11月18日（月）

7:00～ 8:00	ポールラッシュ記念センター早朝特別開館（自由参加）
7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	チェックアウト
9:00～11:30	当日募集ワークショップ
11:30～11:45	移動
11:45～12:40	全体会3・閉会式「屋外でグループに分かれて過ごす時間、閉会の言葉」
12:45～13:45	さよならパーティ
14:00	解散 <ul style="list-style-type: none">●オプション企画「キープ自然学校見学ツアー」（14:00～15:00）●オプション企画「清泉寮ペレットボイラー見学ツアー」（14:00～15:00）

「清里ミーティング」これまでの実績

第1回清里フォーラム

- 日時：1987年9月28日(月)～29日(火)
- 参加人数：93人
- 主催：清里フォーラム実行委員会
- 【分科会】①環境教育について（考え方とその論理）
 - ②自然観察の中に今後とりこんでいきたいもの
 - ③指導者とボランティアの養成を今後どうするか
 - ④施設運営とコーディネーターの在り方について
 - ⑤自然観察の有料化について
 - ⑥清里フォーラムの将来性・方向性について
- ゲスト：加藤幸子（小池しげんの子）

第2回清里環境教育フォーラム

- 日時：1988年11月13日(日)～15日(火)
- 参加人数：151人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／山梨県
- 【分科会】

前半 ①学校と環境教育	後半 ①地域・開発と環境教育
②地域社会と環境教育	②施設と環境教育
③施設と環境教育	③人づくりと環境教育
④自然観察と環境教育	④市民・行政・企業・学校の協力
⑤企業と環境教育	⑤環境教育の目的と方法
	⑥学校と環境教育
	⑦企業と環境教育
- ゲスト：ロバート・ピナウィーズ（元ヨセミテ国立公園管理事務所長）

第3回清里環境教育フォーラム

- 日時：1989年11月12日(日)～14日(火)
- 参加人数：168人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①小中高における環境教育カリキュラム
 - ②若い世代に楽しいプログラムとは
 - ③環境教育をうまく経営していくためには
 - ④環境教育の場でボランティアが活躍できるためには
 - ⑤環境教育で村おこしができるか
 - ⑥大学における環境教育
- ゲスト：ジェームス・サノ（元マリン・ディスカバリーズ専務理事）

第4回清里環境教育フォーラム

- 日時：1990年11月18日(日)～20日(火)
- 参加人数：163人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校教育 ②事業化
 - ③プログラム ④人づくり
 - ⑤施設 ⑥地域開発・村おこし

※この年4月より上記6つの研究部会が発足。

- ゲスト：ジョセフ・コーネル（ネイチャーゲーム考案者）

第5回清里環境教育フォーラム

- 日時：1991年11月17日(日)～19日(火)
- 参加人数：187人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校 ②事業化 ③プログラム
 - ④人づくり ⑤施設 ⑥地域社会
- ゲスト：ステイーブン・メドレー（ヨセミテ・アソシエーション会長）

*1992年9月 任意団体 日本環境教育フォーラム発足

*1992年7月 「日本型環境教育の提案」発刊

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '92(通算6回)

- 日時：1992年9月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：132人
- 主催：日本環境教育フォーラム設立準備会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【紹介WS】①エコツアー報告・ヨセミテ自然学校
 - ②New School of Conservation における環境教育
 - ③ペンギンリザーブ活動報告
 - ④国際理解教育・資料情報センター活動紹介
 - ⑤フィールドミュージアムごっこ
 - ⑥環境教育国際セミナーに参加して
 - ⑦成城学園における「散歩」「遊び」
- 【体験WS】①さあ、みんなでやってみよう！開発教育シミュレーション
 - ②エコロジーキャンプつまみぐいハイク
 - ③ネイチャーゲーム入門
 - ④もしフィールドでけがをしたら
 - ⑤PLTプログラムの紹介
- 【分科会】①学校での環境教育 ②地域に根ざした環境教育
 - ③エコツーリズムの可能性とその問題点
 - ④環境教育のプログラム教材開発
 - ⑤指導者養成について ⑥エコマネジメントのしかた

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '93(通算7回)

- 日時：1993年11月14日(日)～16日(火)
- 参加人数：154人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②死の準備教育の試み
 - ③マインドクロッキー ④パートナーシップへの挑戦
 - ⑤究極の自然観察会 ⑥たずね鳥をさがせ
- 【分科会】①プログラム ②施設 ③学校
 - ④人づくり ⑤企業 ⑥地域・自治体
 - ⑦エコツーリズム ⑧海外の国立公園情報
- ゲスト：アン・ロベッタ（ストーリーテラー）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '94(通算8回)

- 日時：1994年11月27日(日)～29日(火)
- 参加人数：167人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②ファイブ・トリック
 - ③森の宝箱をつくろう ④地球救出作戦
 - ⑤枯れ木に花を咲かせましょう ⑥清里・冬物語
- 【分科会】①企業 ②エコツーリズム ③都市環境教育
 - ④ネイチャートレイル ⑤自然学校
 - ⑥ネイチャーライティング ⑦フォーラム塾
- ゲスト：ジョン・エルダー（ミドルベリー大学英語学・環境学教授）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '95(通算9回)

- 日時：1995年11月25日(土)～27日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①自然学校としての施設づくり ②行政・自然学校
 - ③自然学校の経営を考える ④自然学校の人材育成
 - ⑤自然学校のプログラム
- 【WS】①写真で環境教育 ②あなたにとって出会いとは何ですか
 - ③環境教育を企画・プロデュースする
 - ④ソフトクリーム姉ちゃんをねえ！
 - ⑤未知なる可能性を求めて
 - ⑥キープ・フォレスターズ・スクールズのプログラム体験
 - ⑦ネイチャーゲーム、アジアと環境教育
 - ⑧独特な日本人に有効な環境教育戦略は？
 - ⑨アース・アート ⑩メディアワークショップ

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '96(通算 10 回)

■日時：1996年11月16日(土)～18日(月)

■参加人数：174人

■主催：日本環境教育フォーラム

■後援：環境庁／文部省／山梨県

- 【分科会】
- ①自然学校の「事業化」
 - ②自然学校でのプログラム
 - ③地域振興と環境教育
 - ④環境保全活動がそのまま環境教育
 - ⑤エコツーリズムの様々な可能性
 - ⑥JEEFの法人化など今後の可能性

【ワークショップ】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②ネイチャーエクスポアリング
- ③清里での川の環境教育を考える
- ④「子供であそぼう」についての御紹介⑤元気がでる自然観察
- ⑥環境教育の本質を考える
- ⑦環境教育を企画・プロデュースする
- ⑧清里で「海の環境教育」を考えよう
- ⑨自然をテーマにしたスライドショー
- ⑩自分への気づきとNGO
- ⑪清里インターネット通信社へようこそ
- ⑫森だくさんの自然体験
- ⑬まちを遊ぼう
- ⑭未知なる可能性を求めて
- ⑮エコビレッジを作ろう
- ⑯アクティビティの“パクリとアレンジやローカライズ”

※1997年4月 環境庁主管の法人格を取得、

社団法人日本環境教育フォーラム設立

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '97(通算 11 回)

■日時：1997年11月15日(土)～17日(月)

■参加人数：170人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／山梨県

- 【分科会】
- ①環境教育の指導者養成
 - ②環境教育の新しいプログラム開発
 - ③環境教育とまちづくり
 - ④環境教育の情報の発掘と提供
 - ⑤企業や行政とどのように組むのか？
 - ⑥新しい交流集会のスタイル

【WS】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②自然と心・心とひとのコミュニケーション
- ③環境教育の服装計画を考える
- ④出たとこ勝負の自然観察会+人間ウォッチング
- ⑤環境教育を企画プロデュースする
- ⑥環境教育と経営と税金
- ⑦インタープリティブサインをつくらう
- ⑧ディーブエコロジー・ミニワークショップ
- ⑨フィリピン流！演劇ワークショップのすすめ
- ⑩安全管理チェックリストをつくってみよう
- ⑪ネイチャーエクスポアリングコースづくり
- ⑫水辺でさがすいろいろなつながり
- ⑬アクティビティと小道具
- ⑭キープの自然体験プログラム
- ⑮博物館をつくらう！
- ⑯野外における企業研修の実際とその可能性

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '98(通算 12 回)

■日時：1998年11月14日(土)～16日(月)

■参加人数：176人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

- 【分科会】
- ①公共事業における環境教育の役割
 - ②森林・里山における環境教育と地域振興
 - ③アメリカの環境教育プログラムの日本への導入
 - ④動物と関わる環境教育
 - ⑤日本型エコツーリズムについて
 - ⑥メディアと環境、その先にあるもの

【ワークショップ】

- ①環境教育個人商店を考える
- ②私のきもち、みんなのきもち、地球のきもち
- ③21世紀のインタープリテーションを求めて
- ④おきらく やまんばの部屋
- ⑤プロジェクトワイルド「水生生物」に学ぶ
- ⑥エコマネーのすすめ
- ⑦もし参加者が野外でケガをしたら
- ⑧ネイチャーエクスポアリング
- ⑨エコスピリチュアルワークの試み
- ⑩アクティビティ大賞実施編・体験編
- ⑪これまでの50年とこれからの50年
- ⑫川を設計してみよう
- ⑬「おもしろ」を「かたち」にはじめの一步
- ⑭自然学校でめしが喰えるか

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '99(通算 13 回)

■テーマ：「学ぶ心・育つ力」

■日時：1999年11月13日(土)～15日(月)

■参加人数：185人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

- 【分科会】
- ①自然学校の運営を考える
 - ②「総合的な学習の時間」で学校と地域をつなぐ
 - ③都市型の生活環境をテーマにした遊び場づくり
 - ④森から見つめる川と海
 - ⑤エコツーリズム一歩前へ
 - ⑥見つけよう地域の里山、伝えよう里山の魅力
 - ⑦チルデンを越える！
 - ⑧教育を考える

【早朝 WS】

- ①カラスのきもち
- ②朝のティータイム
- ③きもちとキモチをつないだら
- ④五感で感じよう清里の自然
- ⑤オカリナ・ハナリナ体験教室

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2000(通算 14 回)

■テーマ：「原点を見つめよう」

■日時：2000年11月11日(土)～20日(月)

■参加人数：171人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

【体験 PRG】

- ①野外での救急法を覚えよう
- ②ネイチャーウォッチング in 清里
- ③清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
- ④心と体で感じよう！ネイチャーゲームが案内する清里の自然
- ⑤竹を使ったものづくり
- ⑥羊の毛から糸つむぎ教室
- ⑦自分という自然に出会う
- ⑧Frog (カエル)
- ⑨プロジェクト・アドベンチャー

- 【分科会】 ①自然体験活動における体験学習法
②ゆったり楽しむ ノスタルジーワーク
③虫を知る・入門
④「センス・オブ・ワンダー」って何だ？
⑤学校ビオトープの可能性
⑥五感を使って楽しみながら自然探検
⑦環境教育とスピリチュアリティ
⑧企業・行政マン向け環境教育テキスト作り
⑨自然学校のPR活動を考える
⑩Out of Treasure Boxes
⑪民話・ことわざから考える日本人と川の関係
⑫エコツーリズムのビジネスネットワークを考える
⑬表現を楽しもう！「シアターゲーム」

- 【早朝 WS】 ①野遊び手遊び発見隊
②センス・オブ・ワンダーの体験
③地球と私の合作づくり “1枚の葉”
④見て、聴いて、感じて…朝の森でネイチャーゲーム
⑤早朝ジョギングワークショップ
⑥キモチときもちをつないだら

■スライドプレゼンテーション

■JEEF 理事による3分トーク

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2001(通算15回)

■日時：2001年11月17日(土)～19日(月)

■参加人数：192人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/農林水産省/林野庁/山梨県

- 【体験 PRG】 ①清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
②初心者歓迎！清里の自然をネイチャーゲームで楽しもう
③秋の味覚を楽しもう！
④「ほっ♪」となるたき火講座
⑤身体感覚講座
⑥The Bear (ひぐまの生き方、暮らし方)
⑦プロジェクト・アドベンチャー
⑧やまねミュージアムへ行く

【分科会】

- ①総合的な学習の教材として「拾ったもの(生きものに関連するもの)を活用する」
②「いまだき」の子ども・「いまだき」の親 改造計画！
③博覧会を環境教育という視点から評価する
④ゆったり過ごすやまね流ネイチャーワーク
⑤ワークショップという新しい学び方をめぐって
⑥朝からイキナリ！若者で語ろう！の会
⑦小さな子どものための環境教育の“技”をさぐる
⑧地域の昔話を中心にした環境教育
⑨農業と林業を語ろう！農業者と林業者と語る環境教育
⑩Environmental Education in English
⑪北九州博、きらら博で行われた環境教育プログラムはこれだ！
⑫テロ・戦争に関してわからあう
⑬環境教育基礎講座
⑭GEMSの体験プログラム
⑮自然学校で働くこと
⑯センス・オブ・ワンダー
⑰ネイチャーエクスプロアリングライトの体験と総合的な学習の時間に活かせる活動事例
⑱田んぼから生まれる日本型環境教育

【早朝 WS】 ①センス・オブ・ワンダーを楽しむ

②早朝ジョギングワークショップ

■スライドプレゼンテーション

■参加者による3分トーク「ここが変だよ！環境教育」

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2002(通算16回)

■テーマ：「胎動」

■日時：2002年11月16日(土)～18日(月)

■参加人数：182人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

■環境教育ミニレクチャー

■ヨハネスブルグ・サミット報告

■参加者による3分トーク「環境教育 次のキーワードはこれ!？」

【ワークショップ】

- ①地域通貨ってなんだらう？
②折り紙を使った環境教育の試み(3)
③幼稚園、保育園に環境教育を導入しよう
④環境問題、エコロジカルアートからの試み
⑤環境教育指導者と研究者、カリキュラム開発者のつながりを作ろう
⑥体験主義を超えて…プロジェクト・ワイルドの世界
⑦「自然の中で働く男性はオバチャン度が高い??」を証明したい!!
⑧未来へ、世界へ、感動をどうつなぐのか
⑨ひよこのキモチ
⑩モアイは何を見たか
⑪Environmental Education in English
⑫持続可能な開発と環境教育
⑬森の交響サイン計画づくり
⑭サロンの語り場

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②清里ミニガイドツアーA

③清里ミニガイドツアーB

④モンゴル茶で朝を迎えよう

⑤清里ミニガイドツアーC

■スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2003(通算17回)

■キーワード：持続可能な開発のための教育

■日時：2003年11月15日(土)～17日(月)

■参加人数：208人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

- ・科学と環境教育をつなぐミーティング(前夜祭)の報告
- ・環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律
- ・持続可能な開発のための教育(ESD)
- ・スライド&トーク 一オロニの日々

【WS&体験 PRG】

- ①ワラっていいとも
②社会教育ゲーム体験プログラム 投資意志決定ゲーム Chemical
③参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/AM
④総合学習へのNPO 参加が期待されているけど、実現が難しいのは何故？
⑤エコ・ネイションゲーム
⑥忙しい!!! けど前向きに レベルアップシートを作ろう
⑦科学するココロを育てよう!
⑧参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/PM
⑨野生生物教育の現状と課題
⑩フォーラム企業部会をリセットして、今後の方向性を考えよう!
⑪「持続可能な人」づくり
⑫開府400年! 江戸町民の循環型社会から学ぶごみ減量大作戦
⑬どうなる? どうする? 日本環境教育フォーラムの未来
⑭子育てという環境
⑮地方発! 食農発信!
⑯環境教育の中の行政の役割を考えよう!

【早朝 WS】 ①センス・オブ・ワンダー

②清里ミニガイドツアー 富士山とせせらぎの小径コース

③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2004(通算 18回)

- キーワード：「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前
- 日時：2004年11月13日(土)～15日(月)
- 参加人数：187人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

- ・「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前
- ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を考える

【WS&体験 PRG】

- ①エコツーリズムという生き方
- ②科学と環境教育
- ③地場産小麦でパンをつくろう！
- ④環境立国 エコ・ネイションゲーム
- ⑤「センス・オブ・ワンダー」からグリーンコンシューマーへ
～第1回清里「エコ商品コンテスト」～
- ⑥持続可能な地域づくりにつながるネイチャーゲーム体験
- ⑦体験学習への扉をひらく(午前の部)
- ⑧自然学校の動きと人材養成
- ⑨環境教育 in 国際協定 最新線！
- ⑩環境教育基礎講座「環境教育と自然体験」
- ⑪酵母を育てて、パンを作ろう！
～酵母が教えてくれる、命、自然とのつながり～
- ⑫石器時代に接近！モノはこうして作る ～シエラカップ～
- ⑬いのちを伝える自然体験 ～自分流健康な生きかたを学ぶ～
- ⑭ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑮体験学習への扉をひらく(午後の部)
- ⑯「1億円のプロデュース」

【特別ワークショップ】

パーム油のはなし ～開発教育入門講座～

- 早朝 WS ①早朝ジョギングワークショップ
- ②センス・オブ・ワンダーって、こんなに楽しく気持ちいい
- ③清里ミニガイドツアー めしの木コース
- スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド
- JEEF 公開理事対談

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2005(通算 19回)

- キーワード：「自然を舞台にした環境教育は、持続可能な社会作りに具体的にどのような役に立ってきたのか」
- 日時：2005年11月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：221人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会：基調講演、5分間スピーチ、パネルディスカッション**【WS&体験 PRG】**

- ①環境教育基礎講座(午前の部)
- ②自然学校って何だ？
- ③学校教育と環境教育
- ④ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑤ひとりひとりの感性で自然を感じとろう
～ネイチャーゲームでのんびりぶらぶら～
- ⑥セルフガイドシートを使用した、短時間、多人数対象プログラムの検証
～セルフガイドシートの評価軸を作ろう～
- ⑦科学ってなんだろうと考えながら皆で遊ぼう！
～低学年向けの GEMS プログラムを通して～
- ⑧森林療法
- ⑨プロジェクトWE T 体験会(午前の部)
- ⑩環境教育基礎講座(午後の部)
- ⑪自然学校の評価に向けた人材養成
- ⑫小さな町村での自然学校の役割と可能性を探る
- ⑬CSR と環境教育
- ⑭おいしく食べ続けていける社会づくりは、・・・
- ⑮里山で音楽会

- ⑯樹木年輪から樹の声を聴く方法！ ～過去からの環境の変化を辿る～
 - ⑰プロジェクトWE T 体験会(午後の部)
 - ⑱科学と環境教育 見直そう！あなたのインタープリテーション
～持続可能な社会づくりに自然科学知を活かすために
- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ
②座禅&ヨガ
③清里ミニガイドツアー
- スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド
 - JEEF 活動報告

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2006(通算 20回)

- 日時：2006年11月18日(土)～20日(月)
- 参加人数：224人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会「日本の環境教育 この20年を振り返る」基調講演
- 学長鼎談「大学と環境教育」

【WS&体験 PRG】

- ①自然学校を事業化する ～20年間に自然学校は何を獲得したのか～
- ②団体・組織におけるリスクマネジメントを考える
- ③あなたにとって食育ってなに？
- ④環境教育基礎講座
- ⑤新型の起業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
- ⑥学びとコミュニケーション ～GEMS プログラムの体験を通して～
- ⑦ESDの実践のポイントを探る ～みんなで話せばわかってくる!?～
- ⑧森林環境教育のすすめ ～木が好きなになるプログラム～
- ⑨50分プレゼンテーション(午前の部)
- ⑩企業とNPOとの協働を考える戦略会議
- ⑪環境教育とESD(持続可能な開発のための教育)の関係性を探る
- ⑫環境教育と地産づくり
- ⑬環境教育仕事塾
- ⑭行政との連携を考える
- ⑮大鼓で太古に退行するぞ！
- ⑯木から樹を知る方法 ～木材をIPにいかす～
- ⑰セルフガイドで使えるしかけ展示のモデルをつくろう
- ⑱50分プレゼンテーション(午後の部)
- ⑲自然への感動を生み出し、ライフスタイルの転換を促す
科学的知識の伝え方

⑳感性？科学？どちらのインタープリテーションショー

- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ
- ②環境質問 ～答えのない問題～
- ③ロシアからやってきた冬鳥を探してみませんか
- ④清里ミニガイドツアー
- ⑤清泉寮 朝さんぽ

■環境ショート映像作品上映会

- 今後の戦略会議
- スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2007(通算 21回)

- 日時：2007年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：230人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■省庁プレゼンテーション

- 全体会：「生物多様性」基調講演
 - ・第3次生物多様性国家戦略が目指すもの
 - ・企業が取り組む生物多様性保全

【ワークショップ】

- ①「生物多様性」の見つけ方・伝え方
～自然体験活動を、生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法～
- ②行政との協働を考える
- ③学ぶ環境としてのコミュニケーション ～GEMS とゴードンメソッド～

- ④食育コミュニティをつくろう!
- ⑤どこでもインタープリテーション! ~グッズ展開型 IP~
- ⑥関西発! これからは日本的でいいこう!!
- ⑦新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
スピード・ソリューション~自然学校版~
- ⑧企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑨ツリークライミング? 樹上の世界から学ぶこと
- ⑩50分プレゼンテーション
- ⑪企業と環境NPOとの協働を進める戦略会議
- ⑫ESDを広める人のための「ESD入門講座」
- ⑬環境教育基礎講座
- ⑭生物多様性と環境教育について
- ⑮科学と環境教育 自然体験からライフスタイルの転換へ
~ヤマネのプログラム体験を通じて~
- ⑯メディアと自然学校
- ⑰環境経営戦略ゲーム体験会
- ⑱体験型展示物を評価しよう
- ⑲エコツーリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ!
- ⑳障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
- ㉑やってみよう!! 体感 ツリークライミング®の世界
- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ
②センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩
③清里ミニガイドツアー
- 今が旬の活動事例紹介
- スライドプレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2008(通算 22 回)

- 日時: 2008 年 11 月 15 日(土)~17 日(月)
- 参加人数: 192 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会: 「日本型環境教育の知恵 出版記念」~日本型環境教育とは~
- 【ワークショップ】
- ①科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
- ②生き物との共生について ~どんな共生があるのか~
- ③環境教育&ESDを”広げる×深める”政策を考えよう
- ④お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ!
- ⑥エコとエネをつなぐ環境教育を考える
- ⑦森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑧環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
- ⑨企業・NPO・学校の連携による環境教育を考える
- ⑩企業のための環境NPOカタログ編集会議
- ⑪どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
- ⑫科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
- ⑬オオバコずもうで勝つ方法! 理学系研究室の自然体験
- ⑭川遊びのルールを広めよう
- ⑮日本型、日本的を考える ~日本の自然観という視点~
- ⑯地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす
- ⑰障害者と共につむく環境教育の企画をつくる!
- ⑱森づくりのための戦略会議 ~行政・企業・NPOの協働へ
- 【早朝 WS】 ①砂鉄から鉄を作ろう! 柏崎の製鉄遺跡と自然のかかわり
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
③清里の森で生物発見
④ロシアから渡ってきた鳥と出会しましょう
⑤清里ミニガイドツアー
- 環境教育プレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2009(通算 23 回)

- テーマ: 「生物多様性」~環境教育の役割~
- 日時: 2009 年 11 月 14 日(土)~16 日(月)
- 参加人数: 193 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性」とは何か? 行政・企業・NGO から
 - ・事例紹介「生物多様性 私はいこう伝える」
 - ・全体ディスカッション
- 【ワークショップ】
- ①自然体験型環境教育基礎講座
- ②多様な生物の声を聴く~全生命の集いワークショップ~
- ③科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
- ④企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ! Part2
- ⑥風が吹けば葎屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑦パーマカルチャーと環境教育
- ⑧幼児~小2に伝える生物多様性 ~生物多様性の形を探る~
- ⑨ビジターセンターを運営側から考え創る方法
- ⑩あなたにとって、生物多様性って何?
- ⑪生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
- ⑫人間界に多様性は確保されているか
- ⑬日本の森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑭どうプログラム化しよう? 自然学校の「エネルギー」
- ⑮風が吹けば葎屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑯日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑰エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
- ⑱事故防止~注意を促すだけでいいの? 実践的予防安全法
- ⑲トランジションタウンとは何か? 都留での試み
- (注) ⑦川遊びを始めよう! ~川の安全管理トレーニング~ は、都合により中止
- 【早朝 WS】 ①生物多様性を映像で感じよう ~いっしょに生きる道~
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
③ゼロからの火おこし術
- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2010(通算 24 回)

- テーマ: 「いのちをつなぐ環境教育」
- 日時: 2010 年 11 月 13 日(土)~15 日(月)
- 参加人数: 177 人
- 主催: 公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性条約第 10 回締約国会議の結果」
 - ・提案「生物多様性保全に果たす ESD の取組について」
 - ・提案「What is CEPA??」
 - ・取組紹介「環境省における ESD の取組について」
 - ・全体ディスカッション
- 【ワークショップ】
- ① 自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ② 日本の自然観から考える環境教育
- ③ 農的暮らしの学校
- ④ 自然感を耕す: 人は心を、畑は土を、森はデザイン感を
- ⑤ 生物多様性まんだらカードゲーム体験会
- ⑥ 生物多様性条約の CEPA って何だ?
- ⑦ 企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑧ エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3

- ⑩「サステナビリティ」の基本はこれだ！ ※
- ⑪これだけは知っておきたい！生物多様性の基礎知識 ※
- ⑫生物多様性を普及する環境教育を目指して
- ⑬森を考える～木質バイオマスで100年先の森づくり～
- ⑭大学生のための食育プログラム
- ⑮命をいただく～ニトリと生きる～
- ⑯エコロジカル・シンキングゲーム
- ⑰「地球交響曲第7番」を見て、みんなで語ろう！
- ⑱イナカとこどもと日本の未来を考える
- ⑲企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える

※の印は、主催者企画ワークショップ

(注) ⑨海外での環境教育(保全)活動を日本でどう伝えていくかは、都合により中止

- 【早朝WS】
- ①バードコールハイク
 - ②多様性を感じる観察会
 - ③ゼロからの火おこし術
 - ④朝飯前の手仕事
 - ⑤朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ
 - ⑥生き方を学ぶ自然観察
 - ⑦ノルディックウォークで早朝散歩
 - ⑧映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
 - ⑨みみをすませば～みんなで作るいのちのものがたり～

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF理事の何でも相談所

※2010年6月 公益社団法人への移行認定を取得、公益社団法人日本環境教育フォーラムへ。

(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2011(通算25回)

- テーマ：「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」
- 日時：2011年11月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：188人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：財団法人キープ協会清泉寮
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/経済産業省/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会1
 - ・パネルディスカッション
 - 「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
 - ②企業・NPO・学校連携の環境教育を考える VOL.2
 - ③質的データ分析(QDA)という手法を学ぶ
 - ④農的暮らしの自然学校
 - ⑤森林療法にできること～森林セルフケアの可能性
 - ⑥里山応援ネットワークを作ろう！ワークショップ
 - ⑦0から仕事を作る～体験からチームを作る～
 - ⑧『ワールドカフェ～自分発！未来をかえる価値観考～』
 - ⑨修験道×環境教育～音色と歩き、体で精神性を感じる～
 - ⑩震災救援組織(RQ 市民災害救援センター)の作り方 ※
 - ⑪ESD×CSR：サステナビリティ教育指針を体感！ ※
 - ⑫やったらできた！エネルギー系企業と弱小NPOのコラボ
 - ⑬環境と文化・歴史・科学 etc.の複合…「旧暦」入門
 - ⑭自然感を耕す 自分と里地里山里水が元気になるワーク
 - ⑮生物多様性まんだらカードゲーム 今年小学生版
 - ⑯PLT, WILD, WETの日本での可能性を考えよう
 - ⑰日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
 - ⑱原発と環境教育～思ったことを話すことからはじめよう～
 - ⑲狩猟×環境教育～森と野生動物と人のつきあい方～
- ※の印は主催者企画ワークショップ

- 【早朝WS】
- ①ゼロから始める火起こし術
 - ②森林療法的プログラム体験～樹林気功と運動療法
 - ③冬鳥と出会って、いのちを感じる
 - ④キープ協会「アニマルパスウェイ」見学ツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2012(通算26回)

- テーマ：「アジアの一員として、日本が今できること～think global actlocal:『リオ+20』の年に考える～」
- 日時：2012年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：177人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：財団法人キープ協会清泉寮
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会
- 全体会「アジアの一員として、日本が今できること～think global actlocal:『リオ+20』の年に考える～」
 - ・基調講演「リオ+20の概要と、NGOの成果と課題」
 - ・パネルディスカッション
 - 「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育入門講座
- ②自然学校人事担当養成講座～ほしい人材を育てよう～
- ③実施無し
- ④プーさんの森をデザインしよう！
- ⑤考えよう！伝えよう！森の”いのち”の知恵と力
- ⑥食から考える価値と暮らし
- ⑦ねん土をつかって、超ミニアースオープンをつくろう！
- ⑧農村と若者～そと者、若者による農山村の活性化～
- ⑨一次産業と社会貢献事業～金の切れ目が本気のはじまり
- ⑩「住み開き」を考えよう～身近に環境教育の場をつくる～
- ⑪「都市と自然の融合～両方見て、初めて見える環境教育！～」
- ⑫木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及をめざして～①
- ⑬地域に根ざすということについてPBEへの招待
- ⑭田舎で生きる！ライフモデル作りワークショップ
- ⑮バタゴニアから学ぶ！持続可能な働き方と歩み方
- ⑯環境教育×植物療法～自然の恵みをヒトの力に～
- ⑰都市型環境教育 小学生向け紫外線プログラム体験
- ⑱文学から見た農的暮らしの可能性
- ⑲理想のシゴト？自然学校職員の本音と未来像
- ⑳身近な環境の総合的「明察」…内なる「マイ暦」を作ろう！
- ㉑農がXを助け、Xが農を助ける～半農半NPOでいこう～
- ㉒エコとエネのつながりを考えるカードゲームワークショップ
- ㉓森で教える国語・算数・理科・社会をつくっちゃおう！
- ㉔木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及へ向け～②

【早朝WS】

- ①科学と環境教育プログラム「静岡のなりたち」
- ②みどりともだちに！泥んこ遊びde苔玉作り
- ③キープ協会「アニマルパスウェイ」見学ツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

1 日目

開会式・全体会 1

開会式 司 会：（公社）日本環境教育フォーラム理事 川嶋 直
主催者の挨拶：（公社）日本環境教育フォーラム会長 岡田 康彦
環境省大臣の挨拶： 環境省大臣官房長 鈴木 正規

全体会 1 テーマ：「私の環境教育トレンド・キーワード」

進 行：（公社）日本環境教育フォーラム理事 川嶋 直

キーノートスピーチ

1. 阿部 治（立教大学 ESD 研究所）
2. 中西 紹一（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）

ワールドカフェ方式・ディスカッション

（敬称略）

主催者挨拶

(公社)日本環境教育フォーラム会長 岡田 康彦

主催者を代表し、会長の岡田より挨拶を行った。昨年よりも相当多くの人に参加いただいたことへの感謝を始めに述べた。また、今年は例年よりも初めての参加が多いことも話をした。

その上で、この3日間を充実したものにさせていただくために、初参加の方から常連の方まで話が自由に話をして欲しいと語った。また、自らの問題意識を持ち、先輩たちを捕まえて関わりを持って、議論してみることも重要であると述べた。トータルとして、この3日間が良い会であったと感じられ、自身もこの会全体を盛り上げることに貢献したという思いで帰っていただけるよう、全員で頑張っていたいただきたいし、そうしていただくことが、この場を用意している、日本環境教育フォーラムの希望であると述べた。



環境省大臣官房長 挨拶

環境省大臣官房長 鈴木 正規氏

清里ミーティング開催にあたり、ご後援をいただいている、環境省の鈴木氏より、ご挨拶をいただいた。始めに、26年続いているこの会への敬意を表していただいた後、話を続けた。

話の内容は、環境問題はこの20数年の間でかなり改善された部分もあるが、温暖化の問題、高齢化の中での過疎の進行、更にはシカの食害などの新たな生態系の破壊など、これまでと違った環境問題に人類が挑戦しなくてはならなくなっていること。今回の参加者も現場で環境教育や環境問題に関して、それぞれ大変難しい問題を抱えていると思うが、参加者が非常に様々な分野、年齢層から参加しているので、このような新鮮な出会いを元に、問題解決の糸口を見出すことができるのではないかと期待を寄せた。

更にご自身が抱えている問題もこの会に参加することで、何かヒントを得られるようにしたいと語った。



1 日目 全体会 1

「私の環境教育トレンド・キーワード」

＜コーディネーター＞ 川嶋直(公益社団法人 日本環境教育フォーラム)

「私の環境教育トレンド・キーワード」とタイトルを付け、全体会を行った。参加者の皆様の色々な「私のキーワード」について考える時間と位置付けた。全体で話を始める前に、阿部治氏（日本環境教育フォーラム理事、日本環境教育学会会長）と中西紹一氏（立教大学異文化コミュニケーション研究科）のお二人からそれぞれ15分程、基調となる話をしていた。

キーノートスピーチ 1

阿部 治氏（立教大学 ESD 研究所）

阿部氏の環境教育のトレンド、キーワードについて話した。初参加もいるので、まずは環境教育とは何かを話、吸収から発信へ、持続可能な生産と商品。連携と共同、グローバル、エコラインエスディーディーズ、東北復興と福島原発事故対応、環境教育の期待といった順番で話をした。

まず始めに、環境教育とは何かという簡単な整理を行った。元々は環境教育とは生態系保全や環境問題に対処する教育、つまり、人と自然の関係の改善が目的であった。これを阿部氏は狭い意味での環境教育と呼んだ。それが時代と共に、その時代のニーズに対応して変化し、今では持続可能な社会の実現に主体的に参加する人の育成、そして、人と自然だけではなく、人と人、人と社会というその関係が今では持続しないため、どのような関係であれ維持するのか、その関係、ビジョンを描き、具体化していく人材を育てていくことにある。つまり、その繋がりや関係の再構築が目的であるということである。具体的な内容の変化の事例として挙げられたのは、環境教育推進法についてであった。これは2003年に作成され、2011年に改正されている。その中で環境教育をどのように言っているかという、2003年の法律では、環境保全についての理解を深めるための教育学習だと言っている。そして、改正後には持続可能な社会の構築を目指し、環境社会、経済及び文化とのつながりなどといったような文言に変化してきている。これらを踏まえると環境教育は、サステナビリティの具体化という点では不変であるが、その時代のニーズに応じて若干変化があると言える。これまで、日本の環境教育がどう変化してきたのかを一言で表すと、「吸収から発信へ」という変化である。日本の環境教育は60年代位から始まってきている。清里ミーティングが開始されたのが1987年であり、その頃は主としてアメリカを含めた海外から環境教育の教材（例えば、ネイチャーゲーム、プロジェクトワイルドなど）を吸収、あるいはそういった環境教育のシステムを吸収するというのが主流であった。それが現在では、日本から海外に発信していくという、「吸収から発信へ」というように変化してきた。それは様々なテーマでの国際協力、国連ESDの10年など、生物多様性の10年、里山イニシアチブなど、様々な活動を通じて発信してきていると言える。

続いて阿部氏はトレンドキーワードに関して話を移した。

最初に挙げたのは、持続可能な生産と消費であった。これは、今日の環境問題のまさに根本的な矛盾と言える問題であると述べた。人口の増加などの問題もあるが、我々が使用している物の消費の問題、さらには消費を満たす生産の問題があり、これがこれからも大きなトレンドになっていくと述べた。その事例として、事業者、消費者、あらゆるステークホルダーについて挙げた。事業者としては、持続可能な生産がトレンドである。例えば、国連グローバルコンパクトや企業の社会的責任、CSRという視点からもトレンドとなる。

また、消費者として持続可能な消費をどのように具体化していくかに関しては、例えば昨年作成された消費者教育推進法の中では、消費者自身が、自分たちの消費活動が、地球環境あるいは未来に与えている負荷をどう捉えていくかということについて述べられている。また、あらゆるステークホルダーに関しては、今日最もひびいた課題について、事業者のみならずあらゆるステークホルダーが責任を負っているという視点において、この持続可能な生産と消費がこれからますます重要になってくる。

そして生産と消費に関する例として、社会的責任の7つの中核的課題が挙げられている、ISO26000の話も挙げた。この課題の一つはガバナンスをベースにコミュニティへの参画、あるいは消費者課題など色々な問題があるということである。

次のキーワードとして挙げられたのが、連携・協同である。これは先にも挙がっているISO26000に関することでもあるが、1992年のリオサミットのアジェンダ21で出されたような様々な主体、ステークホルダーが今の私たちの持続可能性に責任を負っているということである。これは、いわゆるメジャーグループというような形で若者、先住民など、様々な主体が連携・協同しながら持続可能な社会を目指すという流れがこの20年を終えて現在定着してきている。このフォーラムに参加する企業の方々もまさに、連携・協同を意識しており、この流れの中で持続可能な開発のための教育はサステナビリティを進めていくためには、自然環境の保全がベースである。環境が破壊されたら私たちの生活そのものが無くなってしまおうという環境ベースである。その上で他文化理解、福祉や人権といったあらゆる課題をサステナビリティ統合していくというのがESDRである。ESDを進めていくためには様々なステークホルダーの連携・協同が不可欠であるということである。これはISO26000でも言えることである。そして、改正環境教育推進法では連携・協同を特に強調している。様々なセクター、特に行政とNGO、事業者等の連携・協同が社会を変えていく鍵であると言われていた。また、この消費者教育推進法においても消費者教育だけの課題ではなく、環境教育や国際理解教育、あるいは食育というような多様な活動と常に協同することが必要であると掲げている。そして、グローバルというグローバルとローカルの二つの視点をきちんと持ちながら、2つの視点をつないでいくという視点が非常に大事である。グローバルの意味の内の1つはローカルである。これは地域をベースにした環境教育である。私たちの生活の拠点は地域である。地域をどう持続可能な社会に変えていくのかという問題である。現在、日本においては地方における過疎、高齢化の問題、あるいは里山の崩壊の問題がある。また、都市部においても高齢化の問題はあり、例えば東京では2020年をピークに人口が減少していき、2050年には1,200万人の人口が減少し、人口の1/4が、65歳以上のシングルであるという状況がシミュレーションされている。その

ような中で、これからどうしていくのかという問題である。つまり、地域再生というのは地方だけではなく、都市においても再生が必要となり、地域再生のためには里山の保全というのはレジリエンス、地域の回復力を高めていくために、非常に重要であると言える。ここで言う回復力というのは、里山あるいは地域だけではなく、都市部のレジリエンスをどう高めていくかという問題は正に環境教育の課題である。そして、グローバルな視点としては、気候変動を中心とした地球環境問題を当然未来の問題でもあるが、私たち自身の問題でもあるということである。そういう意味で生活は不可分であり、気候変動やあるいは生物多様性というような地球環境問題というのを評論家ではなく、私たち自身の問題としてしっかりと捉えていくことが大切になってくる。それと同時に、この気候変動等に対応した環境教育、適応を目指した環境教育が必要となってくるであろう。そして、国際協力が大切になってくる。今、日本の中で様々な連携・協同があるが、同時に国際的な連携・協同が大事になってくる。また、ローカルとグローバルを結んでいくことが非常に大事である。

さらに、次のキーワードとして国連エスディーディーズを挙げた。現在、国連は2015年まで国連ミレニアム開発目標に取り組んでいる。この後継として国連エスディーディーズが始まるが、持続可能な開発は待たないという中で、環境の問題と格差貧困の問題をどう両立させていくのかということがこれからのグローバルな課題である。その中で指導者の育成、あるいはあらゆる人たちがこのESDを目指し、ライフスタイルを変更していくという意味では、このESDが今後の世界のトレンドになっていく。このESDは環境教育をベースとした持続可能性の教育のための統合である。この広い意味での環境教育がさらに展開していくと予想される。そこで日本で追進し、発信していくことが必要である。そして、日本において、まず欠かすことができないのが東北の復興であり、福島原発への対応である。この東北の復興は環境教育と非常に親和性が高い。それはこの復興の底流には私たちが目指す持続可能な社会における三つの構成の世代内、世代間、種間というベースがあり、そして参加する市民の存在なしにこの主体的な復興はあり得ないということである。そして、現在東北では、切られた人と自然との

関係の再構築を目指すあたり、環境教育にプラットフォームとしての役割が期待されている。この経験を生かし、震災後の新たな持続可能な社会の創造を提言するという事は日本だけでなく、国際的にも非常に重要であると阿部氏は考えている。このように、気候変動等が大きくなっていく中で環境教育と防災教育や災害教育と関係はこれから、より求められてくるということである。さらに、福島第一原発事故への対応では、水俣病の問題から得た経験や教訓を存分に活かし、差別や分断、社会集団の分断という問題に対処していく必要がある。放射能汚染地域での生活に対して、環境教育という視点からどう対応していくのかという問題がある。環境教育の原点は自然体験だが、外で実施できなくなった現状にどのように環境教育を活かしていくのかという問題がある。そして、脱原発に向けた代替エネルギーやライフスタイルの推進を、どのように展開していくのかということが、緊急かつ重要な課題である。持続可能な社会を築いていくためには今既存の学問では対応しきれない。そのため、新たな学問である様々な専門分野を融合させる、トランスディシプリン（超域学）という視点が重要であると言われている。そういった意味で環境教育は、この超域学を作っていく根となる可能性があり、これからますます真価が問われてくるので、若い方にぜひこれから環境教育を牽引して欲しいと期待の言葉を締めくくった。



キーノートスピーチ2 中西 紹一氏

(立教大学大学院

異文化コミュニケーション研究科)

広告プランナーの中西氏は、広告や新商品開発を行うときに実施するワークショップの実験から得た、キーワードを紹介した。

まず、MOOC (Massive Open Online Course) について紹介した。MOOCとは、オンラインで授業を提供するシステムである。インターネットを通じた大規模公開オンライン講座というのが、現在、実施されている。これはカーンアカデミーというアメリカの団体が最初にスタートし、オンラインで世界中に質の高い授業を提供しようという動きが現在全世界ある。このような現状を受けて日本もJMOCと名前を付けて、NTT データや富士通、NTT ドコモなどが出資をして、オンラインでの大規模公開講座のソフトを充実させようという動きがある。この引き金となったのが、カーンアカデミーという、質の高い授業をオンラインで全て提供しようと始めたグループである。現在、色々なところがソフトを提供し始めており、カーンアカデミー自体はダイヤモンドオンラインのようなマスコミにどんどん進出してきている。その中で、オンラインシステムとオンラインの教育と環境教育がどのような結びつきがあるのかということに

関しては、質の高い授業をビデオで提供するということになると、授業の形態をどのようにするのかという話に及んだ。そこで、次に紹介されたのは、質の高いビデオの授業に対応して、出現してきた反転授業という授業形態である。通常は授業を教室の中で受けるが、反転授業とは、教室に来る前にオンラインでビデオを見て、授業を受けてくるという授業形態である。これも日本で少しずつ取り入れられている。佐賀の武雄市にある小学校では、反転授業を試行しているという例を紹介した。これまで、教室では一方向的な形で情報伝達がされてきており、それが教育現場の大多数であった。しかし、オンライン授業や反転授業のようなことが起こってくると、教室の中身が質的に変化してくる。今まで、授業で一方向的に聞いてきたことを事前に関き、修得することが出来るとなると、教室で何をするのかということになる。そこで必要とされたのが、アクティブラーニングというものである。つまり、一方向的な情報伝達は事前に済ましておき、教室ではそれを深めていくという流れである。この事例として、マサチューセッツ工科大学 (以下、MIT) のI

キャンパスを挙げた。そこは、アクティブラーニングの実験施設であり、科学教育の教室で討論したりしながら、学びを深めていくというような実験的なことを実施している。この実験についての効果を求めたデータでは、一般伝統的ないわゆる一方向的な授業で教えた場合、どのくらい成績が伸びたのかを見ると、ローレベルの位置の人は結構伸びるが、ハイレベルの位置にいる人は伸びが結構頭打ちになってしまう。しかし、アクティブラーニングでは、ローレベルの人が伸びるのはもちろんのこと、ハイレベルの人が60%も伸びている。このように、共同学習は実証的に効果があるということは、すでに実証されている。

その中で、共同で学習をするという時に、一つ問題がある。例えば、中学、高校、大学のどこでも良いが、勉強する際に「AグループとBグループで分かれて、それぞれ共同で、課題について議論してきてください」となった時に、4、5人が集まって議論していたり、学びを深めることができるような空間がない。現在、様々な大学でラーニングコモンズという言葉聞く機会があり、共同で学びが出来る場所を何とかしようという動きがある。その事例として、ラーニングコモンズで一番知られている東京大学の情報学科を挙げた。情報学科の大学院生が勉強をする場であり、例えば、パーカウンターのような机で2、3人が立ち話をしながら議論出来るようにしていたり、机を組み合わせて、何人でも議論が出来るように形作れる机などがある。いわゆる共同学習というものをどんどん進めていく流れが今非常に多くなっている。そして、ここで問題になる課題が1点挙げた。オンラインの教育が進み、一方向的な情報はオンラインで聴くことが前提となり、授業を共同学習にするとした場合、教員の育成では、共同学習の方法を教えていない。教員が出来ないとなった場合、誰が行うのかということになる。それは、共同学習やコラボレーション、学び合い、それを深めていく経験があるなど

のスキルを持った人間が行うべきであり、その時が環境教育に携わっている人間の出番であると、中西氏は述べた。最後に、中西氏は大学がクォーター制(4学期制)になるという話から、その制度と環境教育の必要性について語った。4学期制というのは、6月から8月を夏休みにし、6月の短期留学、欧米のサマースクールの語学研修に行き、単位を取得できるようにするために取り入れようとしている制度である。しかし、日本全国の大学生が、全て海外に行くことは困難であるため、国内で活動をしたり、復興支援の活動をするなどの方法で、単位を提供するような形になる可能性もある。このように、クォーター制度が導入されればされるほど、共同学習をすることで単位を取得するという規律が増えていくのではないかと考えられる。そのようになることで、環境教育が必要とされるようになるのではないかと。つまり、学びの風景が変わり、一方向だけでなくなくなった学びをデザインするのは環境教育である。トランスディスプリンのように、様々なアカデミズムを跨いで、色々な課題解決をしていこうとなった時に学びのデザインやサポートを行うことに関して、環境教育を実践している方に期待していると中西氏は述べた。



ワールドカフェ方式・ディスカッション

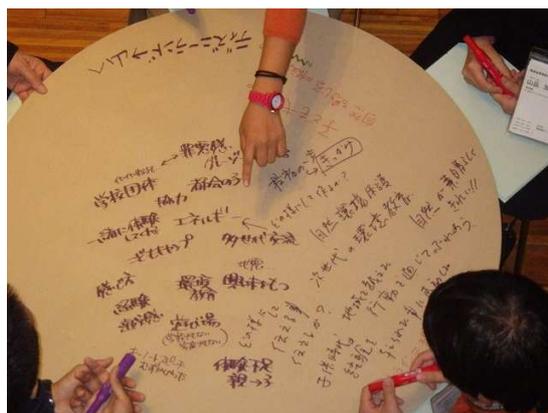
全体会1のテーマ、「私の環境教育トレンド・キーワード」に関して、ワールドカフェという方式で、参加者全体で話し合った。ワールドカフェとは、なるべく多くの人と話し合うことができ、その内容を多くの人が共有することができる、ディスカッションの方式である。

今回は、4~6名位1つの円形のテーブル(段ボール)を囲み、自己紹介から始まり、それぞれのトレンドキーワードについて、書き出し、話し合うという行程をテーブルのメンバーを変えて、3回実施した。座ったテーブルを離れる際には、自分の名前を書いているというルールにした。

1回のディスカッションごとに、テーブルを管理するテーブルマスターのみを残し、他の人は別のテーブルへ移動する。1回のディスカッションの時間は20分間とし、移動する際には出来るだけメンバーがバラバラになるようにした。新しい場所に着席したら、テ

ーブルマスターの人は、着席した人へ2~3分でそれまでの対話の内容を伝える。3回目には誰も同じ人がいない席へ座る。最後には、最初にいたテーブルへ戻り、10分間程話した。内容は、テーブルマスターから、これまでのディスカッションの話をし、他の人たちは、他の席で聞いてきた内容を話す。

会場では、参加者さんたちが、身振り手振りをしながら真剣に話す様子、隣の人と楽しそうに話している様子、深く傾きながら話に一生懸命耳を傾ける様子が見られた。最初は白かった記入用紙は、最終的には参加者さんたちの持っているキーワードで埋め尽くされた。書き方も様々であり、系統樹のようにになっている所、イラストが入っているところ、文字が所狭しと書かれているところなど、テーブルによって様々であった。キーワードには、インタープリーターの在り方に関するもの、森の保全に関するもの、里山に関するものなど様々であった。



2 日目

3 時間ワークショップ

【午前の部】

1. 自分の仕事を創る技術 ～IP の新しい可能性を考える～
2. 地域に根ざした環境教育 Place-Based Education
3. モミでごはんを炊こう！空き缶で「ミニかまど」づくり
4. 宇宙船地球号体感インプリ:20 世紀天文少年の誘い
5. 環境教育をカードゲームで考えてみよう～エネルギー編
6. 「原発事故のはなし 3」デモとディスカッション
7. 質的データ分析(QDA)を体験してみよう
8. 企業と NGO の幸せな関係をながく続ける秘訣
9. 楽器を使ったプレゼンテーションを考えよう
10. 知っておきたい基礎知識～命・自然・地球・宇宙～

【午後の部】

11. 日常の現場や暮らしに持ち帰る“運営と振り返り”
12. 持続可能な地域のための必要なしくみを考えよう
13. 継承したい日本的自然観～自然体という生き方～
14. 事例から学ぶ ESD (持続発展教育)の基本と実践
15. ゲームで生態系を学ぼう！
16. ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術
17. パフォーマンス評価の世界の潮流
18. 15 年のノウハウ伝授!身近な素材でプログラムづくり
19. 小学校で環境教育をやりたい人 集まれ！
20. 伝える技術 KP 法 (紙芝居プレゼンテーション法)

(実施者名、敬称略)

自分の仕事を創る技術～IPの新しい可能性を考える～

実施者：河野宏樹(環境教育事務局 Leaf)、菊間彰(よろず体験事務所 をかしや)

仲上美和(同志社大学大学院 総合政策科学研究所 ソーシャル・イノベーション研究コース)



【概要】

前半は「自分の仕事を創るために足りない事は何？」という問のもとに、グループディスカッションを行った。後半は「IPで新しい領域をひらく」をテーマに「私がIPとしてつなぎたいヒト・コト・モノは？」「その活動を通じて創りたい価値は？」という問いのもとにグループディスカッションを行った。最後に「自分の仕事を創るために今後どう行動していくのか」ということを一人一人が全員の前で宣言をした。

【実施内容】

(1) 自分にとっての「IP」とは？

参加者の中には「自分の仕事を創る」というタイトルに強く惹かれて本ワークショップに参加していた。IPが何なのか知りたいという方や、「自分らしい」IPを見つけたいという方、「伝えることを仕事にする方法」を知りたい方がおり、本ワークショップに参加した目的は様々だった。まず、参加者それぞれが「自分にとってIPとは何か」について考え、発表した。意見として「IPとは自然への「気付き」へちょっと背中を押すこと」「埋もれた気付きを発掘するもの」「自然との付き合い方を伝えるもの」などがあつた。

(2) 自分の仕事を創るために足りない事は？

グループディスカッションを行う前に、参加者ひとりひとりが今の働き方と、これから先の理想とする働き方を整理した。(例；今は従業員→未来は半分従業員+半分IP) それをもとに、似た働き方の人同士でグループをつくり、「自分の仕事を創るために足りない事」についてディスカッションを行い、結果を全員で共有した。ディスカッションが始まると会場は一気に白熱し、過去の経験を振り返ったり未来像を思い浮かべたりしながら、真剣なまなざしで議論を進めていた。(以下、各グループのディスカッションの結果)

<今：学生、母、従業員など→未来：従業員>

足りないことは知識や失敗体験。これらを得て自分に自信を持つことで初めて、自分以外の人に様々なことを伝えることができる。
<従業員→従業員>

足りない事は自分の仕事に対するプロ意識と自負。ボランティアスタッフにはできない何かを身に付け、給料をもらう価値のある者だということを自分にも周囲にも認識させて、IPを生業として成

立させる。

<従業員 or 自営業→半分従業員 or 自営業+半分IP>

足りないことは、スキル、経験、働き方を変える決意。決意にむけて今やるべきことを明確にして、それをどんどんこなしていく。

<従業員 or すでに半分自営業+

半分IP→半分従業員 or 自営業+半分IP>

足りないことは、見栄、世間体、過度な便利さなどを「捨てる」勇気。また自分の仕事を創るためには、それらを捨てると同時に「人生のコンセプト」を持つこと、ネットワークの構築、自己投資、生き方を変えることに対する恐怖からの脱却や覚悟を持つことが大切。

(3) IPとしてつなぎたいヒト・コト・モノは？

環境教育におけるIPは、自然と人の仲介となって自然解説を行うことやその人物のことを指すが、インタープリターの標準的な意味は「通訳者、解説者」である。つまりIPとは自然だけでなく人と何かを「つなぐ」ものだ。そこで、「自分の中のIP」をもっと具体的にしていくために「自分がIPとしてつなぎたいヒト・コト・モノ」についてディスカッションを行った。このことを考える上で必要となるのが、自分が大切にしたいと思っている価値、つまり「自分がIPの活動を通して創りたい価値」だ。自分の目指したいIPについて考える時間であった。

【まとめ】

3時間のワークショップを通して、IPとは何かということや、これからの課題、未来像がより明確になった。その課題の解決や、未来像に向かって進んでいくために、今後の1年間ですべきことをそれぞれ書き出し、宣言をした。

「人生のコンセプトを明確にする」「ネットワークを広げる」「ありふれたもののありがたみに気付けるIPをする」「自己分析をする・エコツアーを始める」「IPとして食べていく決意をする」等、一人ひとり熱い思いを述べていた。自分の仕事を創ること、IPの可能性を考えることを通して、今後の生き方や、人生において大切にしたいことなど、「自分」を見つめ直すことができたワークショップであった。

なお、本ワークショップの成果はFacebookページで公開されている。

<https://www.facebook.com/jibunnoshigoto2013>



地域に根ざした環境教育 Place-Based -Education

実施者:大前純一(NPO 法人エコプラス)、水村賢治(NPO 法人エコプラス)



【概要】

環境教育と地域、さらに持続可能な社会づくりはどのような関係にあるのかというテーマで、レクチャー、事例紹介、グループワーク、全体討議を行った。学生から自然学校運営者まで環境教育に興味を持つ幅広い人々が、「地域」ということについて考える場となった。

【実施内容】

(1) アイスブレイク

参加者が輪になって、それぞれの質問について話し合いをしながら並ぶ順番を変えた。質問は、「年齢」から始まり「自宅から清里までの時間」「環境という言葉が気になりだしてからの時間」と進んだ。環境教育に興味を持ち始めて数週間という初心者から、環境教育という分野を立ち上げた20年来のベテランまで多様な人が集まっていることが分かった。

さらに「飲んでいる水が自宅まで来る距離」「災害でライフラインが止まったら何日生きられるか」と進み、「自分の命がどの程度の広がりがある地域で支えられているか」を考えた。その後、自己紹介。「地域に根ざした」という言葉に興味を持った理由や、自分の活動が「地域に根ざしている」か、などを話した。

(2) 「地域に根ざした環境教育」についての概要説明

エコプラスの大前事務局長が、エコプラスの取り組みを紹介。「ひと、自然、異文化」をテーマに、マイクロネシアのヤップ島や新潟県南魚沼市の山里で、その地の暮らしを体験する活動などを示した。その上で、地域に根ざした教育(PBE)について以下のように説明した。

日本の地域社会は近年の都市化によって影が薄くなっていると言われる、しかし、それぞれの地域は何百年、時には千年以上にもわたってその場の自然と調和して存続しており、人々が自然と密接に暮らしてきた知恵と技が残っている。その地域に残る知恵や技を、歴史や文化も含めて学ぶことによって、持続可能な社会づくりを考えることができるのではないかと。

「地域に根ざした環境教育」のモデルを探ろうと、実践者や研究者らが集まって研究会を作り、国内の団体へのアンケート調査、視察・討論会、国際シンポジウムを重ねている。世界的にはPBE(Place-Based Education)と呼ばれ、各地で実践されている。地

域のコミュニティとかかわり、コミュニティの抱える問題を解決するための教育には、About(地域について)だけでなく、With(地域の人と)、On(地域において)、For(地域のために)、In the context of(地域の文脈で)という多様な要素が必要になる。

(3) グループワーク

レクチャーの後に阿部治氏(立教大学教授)高木晴光氏(ねおす理事長)がコメントし、グループごとの話し合いに入った。テーマは「Placeとは何か」「学びについて」「PBEの実例と成果」「PBEに必要な要素」「PBEの可能性と課題」等とした。各グループは話し合ったことを模造紙にまとめて発表した。

(4) 全体発表

グループワークのまとめの発表では、各地で活動している参加者の事例紹介(徳島、長野など)や、学校教育とPBEのかかわり方、都会と田舎の関係、どうして学べば学ぶほど若者は都会へ出ていくのか、都会型のPBEは考えられないか、生命地域主義の紹介、地域愛と市民参加、などが語られた。

【まとめ】

全体討論を終え、中野民夫・同志社大学教授の静かな語り口の中で、全員が目を閉じてふりかえりをした。中野さんは、海から蒸散した水分が雲となり雨となって、水道の蛇口、人間の身体など通って海に還る水の循環を語り、「自分の生命を支える範囲」を想起する時間となった。

全体のまとめとして、私たちの生命は大地に支えられていること、その支えられ方は地域でそれぞれ異なり、その違いを認識することが大切であること、自分の生命を支えるものを考えるにあたって「地域」というキーワードは不可欠で、環境教育でも「地域に根ざす」ことの重要性が増してくることなどを、確認した。

最後に参加者一人ひとりに「地域に根ざすとは・・・？」というコメントシートに記入してもらった。

「地域について学び」「気づき、知り、変わり、続けること」や「墓場を持つこと、自分の田舎にすること」「地域の身体的感覚、地図を共有する」「地域の人が『他人事ではなく』自分事として捉えられる活動をする」「おじいちゃんおばあちゃんの知恵を活かす」などのコメントが寄せられた。



モミでごはんをたこう！～空き缶で「ミニかまど」づくり

実施者：久松信介(柏崎・夢の森公園)、和久井詳子(柏崎・夢の森公園)
小池梓(柏崎・夢の森公園)



【概要】

柏崎・夢の森公園は持続可能な社会の実現をコンセプトにした公園である。現代は、他者や他国に強く依存した社会であり、多くの選択肢を持つことが解決につながると考えている。お米を炊くことを例にする。選択肢が電気炊飯器だけだと、停電時に何もできなくなる。お米を炊くことを電気に依存しているためである。もし、ガスや薪でも炊けるという選択肢があれば、この依存からは脱却することができる。今回は、その選択肢の一つとしてモミガラを使用したかまどづくりを行い、これを用いてお米を炊いた。

【実施内容】

1) かまどをつくる前に

まずワークショップ実施者から自己紹介があった後、参加者全員が1人ずつ参加した理由と共に自己紹介を行った。自己紹介が終わった後、材料、作り方、燃焼時の構造について図などを用いて説明を行った。内容は以下の通りである。

材料(1つ分)

- ・空き缶大(ホールのトマトやラーメンの液だれなどの缶詰)
- ・空き缶小(みかんや桃などの缶詰)

作り方

- ①空き缶大に排気口、給気口の場所をペンでマーキングする。
この給気口が多くなりすぎると、缶の中から熱が逃げてしまい火力が下がってしまう。また、給気口が少なすぎても酸素が不足し火力が下がってしまう。そのため、給気口は多くても少なすぎてもいけない。排気口は空き缶の上部に長方形のものを3～4つ作る。
- ②空き缶小に給気口の場所をペンでマーキングする。
- ③マーキングした空き缶大、空き缶小に電気ドリルを使って穴を開ける。ドリル刃の大きさは6mm。
- ④空き缶大の排気口もペンチなどを使い開ける。また空き缶小の底もくり抜く。

燃焼時の構造

燃焼には大きく分け第一次燃焼、第二次燃焼がある。まずは空き缶大の中に空き缶小を入れる。空き缶小の中に杉や松の葉などを、空き缶小と空き缶大の間にモミガラをいれる。そして空き缶小の中

の杉や松の葉に火をつける。この葉が燃える工程が第一次燃焼である。この第一次燃焼で不完全燃焼が起こり、モミガラからガスが出る。そのガスに火が移るのが第二次燃焼である。そして自然と第二次燃焼が終了し、火が消えるという構造になっている。この一連の流れを炊飯に当てはめると、最初の第一次燃焼が強火となり水を沸騰させる。次の第二次燃焼が中火の役割を担い、最後に火が消えた後の数分が蒸らしの時間である。

2) 実習

説明後、屋外へと移り作成作業を行った。空き缶へのマーキングでは、穴の数や穴を開ける場所に、参加者それぞれの工夫が見られた。

電気ドリルを使って穴を開ける工程では、空き缶を足で挟んでスピーディに作業を行う参加者や、電気ドリルではなくドライバーをトンカチで打ち付けながら確実に作業を行う参加者もいた。作業が終わった参加者から火をつける工程へと移った。今回は作業が早く終わった参加者3名に代表してお米を炊いてもらった。残りの参加者にはハーブティー用のお湯を沸かしてもらった。実際に火をつけてみると、風や清里の寒さのせいもあるのか苦戦している参加者が多かったが、落ちていた木の枝や落ち葉などを使い、火力をあげるなど工夫しながら徐々にコツをつかんでいるようであった。

3) 実食

実際に炊けたご飯を食べてみると良く炊けているもの、少し芯が残っているものなど炊いたかまどによって差があった。また、沸かしたお湯でハーブティーを飲みながら参加者同士で火付けやたき火に対する自発的な意見交換が行われていた。

【まとめ】

いつもはリサイクルしたり捨てたりしている空き缶だが、人の知恵や工夫を加えることでかまどを作ることは、創造性豊かで楽しい。また、燃え残ったモミガラは燐炭となり、畑にまけば土壌改良につながる。制作コストだけでなく、ゴミも「0」でお米を炊くことができることがさらに参加者の関心を集めていた。持続可能な暮らしは、こういった楽しさから生み出されると感じた。また震災時に実用できるのではないかと意見が出るなど、さらなる可能性を感じるワークショップであった。



宇宙船地球号体感インプリ: 20 世紀天文少年の誘い

実施者: 中村照夫(月の会<東京>)、齊藤透(月の会<東京>)

※日鷹一雅(愛媛大学環境 esd)はやむなく欠席

【概要】

前半は、実施者から『宇宙船地球号』を体感するために、こんなインタープリテーション(以下、IP)ができるのでは? というアイデアを提示した。後半は前半の内容を踏まえ、参加者がグループに分かれ、自分たちならどのような IP をするかを討議した。

【実施内容】

《地球の大きさを 30 センチとすると、

地球の周りにある空気層はどれくらいの厚さ?》

ワークショップはこの問いで始まった。参加者は直径 30 センチの地球儀を見ながら、手を使ってそれぞれの予想を表現した(数ミリから数十センチまでの幅があった)。答えは「約 0.2 ミリ(地球の直径 12,742 キロに対し、空気層は 10 キロ程度しかない)」。地球を一つの乗り物と見ると、それは正に乗組スペースの少ない宇宙船である。「私たちは限られた狭い空間の中で生活しているにも関わらず、その実感が薄い」「宇宙船なら、その生活空間に排気ガスを出すなんてナンセンス」といったことが語られた。

《季節のある理由…地軸の傾き》

地球の地軸の傾き(23.4°)と「月」「太陽」との関係の解説を行った。「月」のお陰で地球の地軸の傾きが安定しており、それにより気候が安定している。もし、月がなければ地球の生命はこれほど進化できなかったであろうこと、また「太陽」との関係について、いくつかのクイズとともに解説が行われた。大方の参加者の予想を覆した問いは「地球と太陽が最も近くなるのはいつ頃か」というものであった。多くの参加者の「7月頃」という予想であったが、答えは「1月頃」である。それは、「北半球は冬に太陽が近づくため、南半球より温和な冬になっている」という見方が示された。

《太陽の大きさを 1 メートルとすると、

地球・月の大きさと位置関係は?》

まず、この問いについて参加者が予想した。その後、粘土で作成した 1 センチの「地球」、2.5 ミリの「月」を使い、各自で「地球」「月」の距離を予想した。答えは「地球が 30 個並ぶ距離」。40 年も前にこれだけの距離を飛んだアポロ計画は、現在でも命がけの宇宙旅行と言えるものである。近頃のスペースシャトルとて、地表 300 km 前後 = 1 センチの地球で表面から僅か 0.2 ミリ程度の所を回っていたに過ぎない。因みにこの縮尺で太陽は 120 メートル先 といった解説がされると参加者は驚いた様子であった。

《夜空を観察する際、便利で楽しいコツ》

アイソン彗星が観察できる時期であったこともあり、ゲンコツ一つは約 10 度といった夜空を観察するコツなども紹介された。多くの参加者が習ったことをその場で実践しながら確かめていた。

《暦の種類と長所・短所》

暦は、太陽と月と地球の位置関係が織りなす自然の変化を示すもの = 自然の移り変わりを楽しむきっかけを見つけるものである。

したがって、暦をみること = 自然の移り変わりを楽しむこと = 宇宙船地球号を感じることを言う事ができる。

- ①地球と太陽との位置関係に基づく太陽暦(現行の西暦)。1 年は 365 日。月日そのまま季節を表す。年ごとの比較ができる。
- ②地球と月の位置関係に基づく太陰暦(イスラム暦)。1 年は 354 日。日にちが月相(潮と生命のリズム)を表す。季節は示さない。
- ③太陽と月の位置関係の両方を組み合わせた太陽太陰暦(いわゆる旧暦。東南アジアに普及)。閏月があり、1 年は 354 日か 384 日。潮と生命のリズム(日にちが表す)と季節(二十四節気が季節を表す)の両方がわかる(その点では太陽暦より上位) といったことを、図を用いながら紹介した。

《グループワーク》

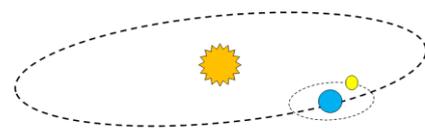
3 グループに分かれ、前半の解説内容を踏まえて、『宇宙船地球号』を体感する IP を検討し、全体で共有した。

「星座の成り立ちを、星座占いなどのエピソードを使いながら子どもたちにわかりやすく解説するプログラム」「参加者が自分たちの星座をつくってみるプログラム」「OHP シートに五線を引いて、星図に当てて音楽を作ってみるプログラム」「地球の暦を、季節を五感で感じることで体感するプログラム」が提案された。

【まとめ】

- ・環境教育の現場では「宇宙船地球号であること」を伝えられたら素敵
 - ・それは、チョイ足して意外に簡単
- 補足
- ・太陽暦(西暦)を使っていると、季節や天体の意識が希薄になってしまう。(太陰暦、太陰太陽暦の使用者は、三日月が何時頃・どの方向に・どんな向きで昇り、どう沈んでいくかは、当たり前のように知っている)
 - ・太陰太陽暦は、ファシリテーションの小ネタの宝庫
 - ・学校用の教材は良質かつ安価
 - ・望遠鏡は倍率で選んではいけない。如何に鮮明な画像を見せられるかが肝。初心者は低倍率の方が良い。

太陰太陽暦(旧暦)



- ・太陽と地球と月の位置関係を表す。
- ・1 年は 354 日 or 384 日(2・3年に1回、閏月が入る)

長所: ・日にちが月相 = 潮と生命のリズムを表す。

- ・(二十四節気七十二候で) 季節もわかる。

短所: ・年の比較ができない(平均気温・降水量、企業の業績、金利計算)

環境教育をカードゲームで考えてみよう～エネルギー編

実施者: 藤木勇光(J-POWER 電源開発株式会社)、小林庸一(J-POWER 電源開発株式会社)
南栄助(J-POWER 電源開発株式会社)、小寺昭彦(サイエンスカクテル)、大橋英之(東京理科大学)
平塚雅人(東京農工大学)、藤森亮利(東京都市大学)



【概要】

このワークショップは、コミュニケーションをとりながらカードゲームを行うことでエネルギーと環境とのつながりについて学びきっかけ作りを行うものである。

1 チームをひとつの「国」と見立て、その国のエネルギー資源、経済、環境影響などのバランスを考えながら、暮らしを支えるエネルギーの安定供給の実現について合意形成を行う。その国の「政策」を決定する作業を通して、主体的にエネルギー源の選択にかかわり、意思決定の際に求められる要素を体験する。

【実施内容】

ゲームの流れと参加者の体験

1) 開議

1 チーム4名程度のグループに分かれ、各グループが1枚ずつ「国カード」を引くことにより、その「国」の条件を決定する。「国カード」には経済力や資源条件、発電単価等が記されており、国の特徴が示されている。これを前提条件として、電気料金（経済性）・環境負荷・稼働率（安定性）・自給率の4つの要素の中で最も優先すべき項目を決め公約とする。この公約達成を目指すとともに国民満足度の高さも競う。

2) 第1ターム

発電所カードには、水力、石炭火力、石油火力、ガス火力、原子力、風力、太陽光、ゴミ、バイオマス、地熱の10種類があり、それぞれの特徴を反映した発電単価、環境性能、設備稼働率、自給率の数字が記載されている。それぞれの条件にもとづいて発電所カードの種類と枚数を選択し、発電所を「建設」する。このプロセスを通して、話し合い（開議）による合意形成（意思決定）を体験する。建設が終了すると、2つのアクシデントが発生する（アクシデントカードをひく）。

※アクシデントカード:各タームの終わりに引くカード。世界共通のものとその国独自の2つのアクシデントが発生し、発電所カードに影響を及ぼす。アクシデントの内容は、気候変動、地震、反対運動、戦争、政策変更、放射能事故、技術革新、資源開発な第1タームの建設とアクシデントカードの結果を加味し、4つの要

素を計算し中間発表を行う。

3) 第2ターム

第1タームで生じたアクシデントを踏まえて、さらに冒頭で掲げた公約を達成すべく、新たな発電所を増設する。そして、第1ターム同様に、建設後には2つのアクシデントが発生する。

4) 最終結果

ゲームの結果は、電気料金、環境負荷、稼働率、自給率を算出する。この結果を5段階で評価したものの合計値を他の国と比較により順位をつける。

5) 発表

各タームで建設した発電所や、アクシデントカード、最終結果の数値をまとめ、全体で結果を共有する。

【まとめ】

エネルギーと聞くと難しそうに感じてしまうが、このワークショップはゲームでの話し合いを通して楽しくエネルギーバランスを学べる。発電所には一長一短があり、時にはマイナスなことが起こることを理解しつつ、目的を一にして政策を考えること、疑問やジレンマを共有し、共に解決することなどを体験できた。

今後さらに地域の特質に見合った発電所作りが求められる中、一人一人のエネルギーに対する興味関心も増やしていければ良いと感じた。



「原発事故のはなし 3」デモとディスカッション

実施者: 森 高一(立教大学大学院)、小玉 敏也(麻布大学)



【概要】

本ワークショップでは、日本環境教育学会のワーキンググループが作成した『原発事故のはなし3』を実際に体験してもらい、これから教育の中で原発事故をどう扱っていくかについてディスカッションを行った。対象は中学生～成人で、海辺村という架空の村を舞台にしたシミュレーション教材となっている。

【実施内容】

自己紹介

アイスブレイクと自己紹介を兼ね、参加者がそれぞれ3.11の何をしてきたか、何を感じたかを話してもらった。

①スライド資料

福島第一原発の事故の経緯、事故による地域の住民や環境への影響、事故後の社会情勢の変化など、実際の報道写真や地元の人が撮影した写真44枚によるスライドプログラムとなっている。説明を交えて通して見てもらい、事故をふりかえった。

②ファクトシート

ファクトシートは原発についての基本的な情報を知るための14枚のシートである。1シートごとにテーマを設定し、原発を肯定的にとらえる情報と否定的にとらえる情報が併記されている。このファクトシートを参考にしながら答えを見つける10問のクイズを行った。その後、2つの相反する主張が書かれた「主張カード」と、6つの立場を示す「立場カード」を用いて、どんな立場だったらどう感じるかをシミュレーションした。例えば「原発は安全か危険か」という問題に対して、「①地震・津波への対策も十分に施し安全である」「②放射能による健康被害を考えると危険である」という2つの主張カードがある。「電力会社や原子力産業の関係者」「農業や漁業関係者」「便利で豊かな暮らしをしたいと思う人」「自然や環境を大切だと思う人」などの立場カードを、どちらの意見に近いか考え、主張カードの上に置く。そしてなぜその位置に置いたのかを話し合う。

このファクトシートを通して、同じ問題に対しても所属する立場によって意見や考え方が異なるということが認識される。

③紙芝居

原発施設がどういう経緯で導入されたのか、村の様子や村民の暮らしはどう変わったのか、電力を大量に消費する都市部との不平等な関係性などに焦点を当てた7枚構成の紙芝居である。通常はプログラムの初めに行う想定で、あえてアナログな手描きの絵による紙芝居としている。生徒に興味をもたせる導入として効果的である。

④ロールプレイ

ロールプレイはあらかじめ設定した役になりきり、設定されたテーマのもとグループで会議を行うプログラムである。今回は、原発事故の起こった海辺村で、「海辺村に10年後もどるかどうか」をテーマにディスカッションを行った。参加者はそれぞれ「政治家」「原発を推進する科学者」「海辺村の村長」「村を離れた村人」「首都圏民」など、異なる立場の人間になりきって議論をする。このロールプレイでは、立場による考え方の違いを知り、他者への理解をより深めることが目的である。

【まとめ】

福島第一原発の事故から2年半が経とうとしている。すでにテレビ・新聞などの報道は著しく減り、人々の意識からも遠いものになっているのが現状ではないか。しかしながら、原発の事故処理はまだ多くの問題を抱え、放射能汚染地域では帰宅困難な状況は変わっていない。県内外への避難が続く住民はまだ多い。

首都圏の学校現場ではこの問題を扱うことの難しさが聞かれ、これまで日本環境教育学会で作成を続けてきた教材もどれだけ現場で活用がなされているか心もとない。第3弾となるこの教材は2013年3月に発行した後、制作したワーキングメンバーで何回か体験会を行ってきた。今回もその一つで、環境教育の実践者や関係者に取り組んでもらい、学校はじめ社会でこの問題へのアプローチを増やしてもらいたいという思いがあった。

参加者からのプログラムへのフィードバックや、体験後のディスカッションを通して、決してやさしい問題ではないが、このテーマで多くの人と話をすることがまずは必要で、かつ効果のあることだと改めて認識できた。

環境教育において、この原発問題またエネルギー問題、放射能に汚染された地域とその住民の皆さんについて、これからも真摯に向き合い取り組んでいく必要があると考える。



質的データ分析を学ぶ

実施者: 中西紹一(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科)



【概要】

本ワークショップでは質的データ分析の概念を紹介した。質的データ分析とは、量的データ分析の適用が難しく、実験や統計には適さない研究課題を具体的な人や状況に基づき現象を解明する研究方法として開発された手法である。質的データの収集法には、主に観察法と面接法の2つがある。この分析はイノベーション創発型ワークショップで見落とされてしまう、新たなアイデアの種にも光をあてることを可能とし、さらにインタビュー／ヒアリング内容の全体像を定量的に把握するためにも活用される分析手法である。分析方法を簡単な実習で体験し、この手法の可能性について考える時間となった。

【実施内容】

1. 「質的データ分析」とは？

質的データ分析 (Qualitative Data Analysis = 略称 QDA) とは、現象の性質や特徴など数値で表せない (またはできない) データを扱う手法である。

2. 「質的データ分析」を活用する目的

質的データ分析は、量的データ分析の適用が難しく、実験や統計には適さない研究課題を具体的な人や状況に基づき現象を解明するために開発された手法である。主に以下の抽出を目的に分析が行われることが多い。

- ① 仮説生成 (仮説がない状態から仮説を作る)
- ② 対象の理論化 (質的データを抽象化して得られる概念を組み合わせ、対象を表現する理論を構築する)
- ③ 要素の抽出 (量的研究では黙殺されてしまう少数意見にも注目し、概念のバリエーションを確認する)

3. 「質的データ」の収集法についての紹介

質的データの収集法には観察法と面接法 (インタビュー法) の2つに分けられる。

観察法は視覚データの収集であり、参与観察と非参与観察の二種類に分けられる。参与観察とは観察者がフィールドへ赴き、フィールドに関与することを通して知識を獲得する方法である。非参与観察とは観察者がフィールドに関与しない方法である。

面接法 (インタビュー法) は口頭データの収集であり、個人面

接と集団面接の2種類がある。個人面接とは調査者と回答者が1対1で対面して聴取を行うことである。集団面接 (グループインタビュー) とは共通する問題を抱える対象を一度に複数名集めて聴取を行うことである。

4. 「質的データ分析」の主な方法論

主要な方法論として、実施者は次の3点を挙げた。①GTA (Granded Theory Approach) / データ対話型理論、②KJ法 (川喜多二郎氏/ あくまで発想法であり、理論生成法ではない)、③分析的帰納法

5. 質的データ分析の一般的な手順の紹介

- ① オープン・コーディング: 文字データに「小見出し」「タグ」をつける感覚の作業
- ② 焦点的コーディング (軸足/選択的コーディング): オープン・コーディングを、共通する内容にグループ化しながら再コーディングする。
- ③ 概念カテゴリー (軸足/選択的コーディング): 焦点的コーディングを、共通する内容を軸にカテゴリー化する。

6. コーディングを行う際のポイントについての紹介

キーワードやコンセプトを単独で記述せず、文章化する。データの中で省略された主語や目的語を加えながら文章化することで、新たな気づきや核心にアプローチすることができる。KJ法を実施した時など、概念が見えなくなることが多いが、これを防ぐことができる。

分析の実習として、「デザインの観点を、コミュニケーションという観点から評価していこうと考えています」という例文を出し、参加者と一緒に文の要約作業を行った。要約することが難しい文なので2つのグループに分け、お互いに相談しながら要約した文を発表した。

また、いくつかのオープン・コーディングを示し、参加者と一緒にコーディング内容の要約を行い、概念化の実習を行った。

【まとめ】

質的データ分析は様々な場面において応用される。例えばイノベーション創発型ワークショップの分析手法として活用できる。創発された参加者の意識 (気づき) は、質的のみに捉えることが可能なものであり、ここにこそ新たなアイデアの種が隠れているのである。また、インタビュー／ヒアリング内容の全体像を、定量的に把握することができる。グループ化 (焦点コーディング) した項目のオープンコーディング数をカウントするだけで、対象データのコンテンツ概要やその傾向を、概ね把握することができるため、研究方法としての利用が進んでいる。

企業と NGO の幸せな関係をながーく続ける秘訣

実施者：酒井香世子(株式会社損害保険ジャパン CSR 部リーダー)

瀬尾隆史(公益社団法人日本環境フォーラム理事・事務局長)

【概要】

本ワークショップでは、企業と NGO が協働する具体的な事例紹介や、異業種の参加者によるディスカッションを通し、双方にとって「幸せ」な関係を構築し、それを継続するための課題・解決策を討議した。

【実施内容】

①企業と NPO の協働事例紹介 (損保ジャパン×JEEF)

事例として、「市民のための環境公開講座」、「CSO ラーニング制度」、「SAVE JAPAN プロジェクト」などが挙げられた。中でも、「市民のための環境公開講座」は 1993 年から 20 年以上にわたって継続している社会貢献プログラムで、受講者数は 2 万人近くに及ぶ。NGO と企業が対等のパートナーシップのもと、双方が持つ強みをいかして連携していることが、長期継続の秘訣だという。

また、発言者の中に「CSO ラーニング制度」の OG 生で現在 NPO に勤務している参加者がおり「瀬尾さんが本制度の生みの親だときいて驚いた。この制度がなかったら私の今はなかった」との発言があり、本活動の価値が改めて参加者に共有された。

②ディスカッション・質疑応答より

(1) 課題

・対等なパートナーシップの実現

連携の際、企業は NGO に資金を提供し、NGO はそれに応えるために活動する、という一方通行の関係に陥りやすい。また大企業と、地域で活動する小さな NGO とでは、規模や考え方が違いすぎるため、本来の NGO のミッションを企業側に理解してもらえないこともあるという。そのような中、双方が対等な関係を構築するためにどういう工夫が考えられるのかということが議論された。

・成果の可視化

協働事業による成果は、なかなか可視化しづらい。たとえば、「生物多様性保全」を目標としても、どの種類がどれだけ増えたか計りにくい。え、計れたとしても保全につながったとは言いきれないかもしれない。また、誰が、どのような立場から、どのように評価するのかということも重要である。

・つながりの継続

協働が実現しても、企業の子算は単年度管理であることが多く、中長期にわたって活動を継続していくことが難しいという声があった。また、熱心な担当者が代わるとつながりが維持されなくなることがあるという点も課題である。

(2) 解決策

・対等なパートナーシップの実現

企業と NGO が規模の違う立場であっても、互いの弱み・強みを補完しあうことで、対等な関係を築くことができる。そのためにはまず、互いをよく知りあうことが欠かせない。様々なステークホルダーとフラットに対話、コミュニケーションができる場づくりを進

め、企業と NGO が目的を共有し、ともに作りあげる姿勢をもって協働することが重要である。

・成果の可視化

一方向ではなく、様々な立場から多角的に活動を評価することが重要である。SROI (注 1) などの評価手法を使うことも一つの方法である。また、成果の見せ方の工夫として、活動を一般の人にも理解できるように客観的に評価していくことが望ましい。たとえば、だれに何パーセント、どれくらい好評であったのか明記することによって、活動の評価を可視化することにつながる。(注 1: 社会的投資利益率=social return on investment、SROI は、社会的活動を行う組織体で用いられる成果および業績を数量化して測定する指標の 1 つ。)

・つながりの継続

環境に関心のない人、知らない人に活動の成果を理解させるのは難しい。企業で働く人々を社会貢献活動を体験してもらうことで巻き込んでいくことも協働のヒントになる。また最近では、単なるボランティアにとどまらないプロボノにも注目が集まっている (注 2)。また、食品なら「食に関する社会貢献」、水関連企業なら「水に関わる社会貢献」など、企業の本業と親和性のある活動を選択することで、継続の可能性が高まることも考えられる。あわせて熱意や志を受け継ぎ、ネットワークを広げていくようなコア人材も必要だ。(注 2: プロボノとは、各分野の専門家が、職業上持っている知識・スキルや経験を活かして社会貢献するボランティア活動を指す)

【まとめ】

企業と NGO が幸せな関係を続けるためには、という問いに対し全体を通して議論されたのが、①「対等」なパートナーシップ構築、②活動の「継続性」の担保であった。活動の前提として、企業と NGO の双方がフラットに対話し、理解しあうことが不可欠である。また、様々なステークホルダーがかかわるため、なるべく③多角的に活動を評価し、「可視化」することも重要である。これらの取り組みが企業と NGO の長期的なパートナーシップの継続につながる。



楽器を使ったプレゼンテーションを考えよう

実施者：徳永豊(スリーヒルズ・アソシエイツ)、浜本奈鼓(環境教育 NPO 法人くすの木自然館)
瀬川嘉(フリーアナウンサー)



【概要】

このワークショップは様々な楽器を使い音と共にメッセージを伝えるという行為を体験・共有する参加型のワークショップである。今回は「おむすびころりん」の絵本のストーリーに沿ってバックミュージックや効果音などの音楽を創作し、読み聞かせと合わせて一つの作品を新たに作りだし、最後に他の参加者の前で発表した。

【実施内容】

○導入

20人の参加者の内、半分以上が楽器未経験者であった。しかし「楽器は演奏できなくても音は出せる」という主催者の力強い言葉を受け、ワークショップは開始した。

まずWSの内容の紹介として以前小学校で実践した際のスライドショーを見た。軽くイメージがついたところで準備体操を行い全身と心をほぐした。中には途中で上着を脱ぎ出す参加者もあり、ストレッチと同時にリラックス効果も得られたようである。また体を動かしたり、叩いたりすることで、自分の体からどのような音か出ることのチェックにもなっていた。次は発声練習。全員で「うーっわっ！」とだんだん声量が大きくなるように発声。横隔膜を下げ、お腹のなかの空気を全部出す感じが大切とのこと。何回か繰り返し徐々に手足の動きを重ねることで、より声量の変化やパワーを感じることができた。

○曲作り

体も暖まり参加者同士の距離も少し縮まったところで、今回用意された楽器の紹介が行われた。鈴・ピアノ・ギロ・ウッドブロック・トライアングル・ハーモニカ・笛など楽器初心者でも簡単に音が出せる楽器に加え、主催者・参加者の持参したチェロ・フルート・マンドリンも加わった。次に参加者を5人×4つのグループに分け、各グループで簡単な自己紹介を終えた後、担当するシーン(各班2～3シーン)とストーリーに合わせる音楽作りを始めた。楽器を触りながら音に合うシーンを考える班、先にシーンを決めてからそれに合う音を考える班、楽器経験者のリードでまとめていく班など、

プロセスは各班異なった。しかしどの班もとても楽しそうに進められ、時間が経つにつれてヒートアップし、笑い声まで聞こえるようになった。

○ストーリーづくり

当初の予定の時刻を変更し、1時間程曲作りを行った後各班の発表を行った。どの班も各シーンを上手く表現する作品になっており好評であった。次にこれらをストーリーの流れの順番に組立て、重なっているシーンや共通している登場シーンの音楽の調整に入った。4人でつくったベースを20人でまとめ直すことで、音だけでなく体の動きで表現することなども加わり、よりクリエイティブでみんなの思いの詰まった作品ができあがっていった。

【まとめ = 発表】

当日は清里ミーティング参加者でない親子が多くいらしていたため、集大成として急遽彼らに向けて発表会を行うこととなった。「劇団邪季」というグループ名も改めてつけられ、当日にして初めてお客さんに見せるという、当初の予定を大幅に変更するまとめとなった。見てくださった親子の方々からは「面白かった」「もう一度みたい」というお声をたくさんいただき、中には「手拍子などは観客も参加できるともっと楽しいと思う」といったアドバイスをくださった方もいた。また主催者からも大絶賛の声と共に「無音も音の一つ。間の取り方も大事にしてほしい。」とアドバイスを受け、盛大な拍手で3時間のWSは幕を閉じた。最終的に主催者の方々の提案で、夜の懇親会の時間帯を利用して本館ホールで再度発表会を行った。先ほどの発表よりもまとまりがあり、参加者はもちろん、観客の方々もとても楽しそうに聞いてくださっていた。また終了後にはメンバー全員で机を囲み打ち上げを行っていた。楽器未経験者、不得意な人でも主体性を持って楽しみながら参加することで、その場にいる全員が盛り上がることができ達成感につながるWSであった。



知っておきたい基礎知識～命・自然・地球・宇宙～

実施者:安西英明(公益財団法人日本野鳥の会)



【概要】

生物についての知識がないまま生物多様性を説いている人、命や自然についての基礎や基本を知らないまま環境教育に取り組んでいる事例が増えた。教育的な展開は「基礎から応用」「総論から各論」という流れが必要と思われるが、環境教育に必要な知識とは何だろうか？という視点から、基礎的、総論的な事例を提示し、参加者とともに考えたワークショップであった。

【実施内容】

1) はじめに

講師役から参加者に、「野鳥 eco 図鑑 (安西英明, 2008, 東洋館出版)」の CONE 共通カリキュラムを紹介した部分・雑誌「日本教育」(日本教育会発行)の『知られざるを知り、自分と今を知る』のコピーと、日本野鳥の会による「ヒナをひろわないでキャンペーン」のポスターの3点を配布し、参加者には自己紹介を兼ねて、希望や質問をあげてもらった。希望としては「野外観察に出たい」との声が多く、知りたいこととして「生き物についての知識」「人への伝え方」があった。

2) 善意による被害

「ヒナをひろわないでキャンペーン」が続けられている背景には、野鳥のヒナを助けようという人が増え、巣立ち直後のヒナを拾ってしまう誘拐行為が減らない現状があり、自然や野生生物に手を出すには、相手の理解が必要である。さらに、生産・消費・分解という生物多様性に基づく持続可能性とともに、命の多くは生きのびることなく他の命の食物になる事実を講師役から解説した。

3) 野外観察

秋から冬の観察ポイントとして寒さや乾燥に耐える命、鳥の捕食から逃れる戦略など春を待つあり方のさまざま、植物のタネの作戦などを講師役がレクチャーしながら周囲を散策した。参加者から成虫越冬のトンボ、卵に命を託し死んでいくだろうバッタ、潜んでいたクモ、クモの卵のう、分解者であるキノコなどさまざまな発見があるたびに、解説方法や技術、小道具の活用などの紹介を行った。

4) 室内プログラムの事例

室内に戻ってから、子どもを対象とした事例を知りたいとの希望が多かったため、直接的な触覚を含むアプローチとして、鳥の羽根の観察をした。実物の羽でクイズを行いながら、体を守る、進む、浮かぶ、ブレーキや方向転換など役割ごとの羽の違いを考えた。そして、「鳥はどうして傘が要らないのか？」という問いかけから、羽のミクロな構造や鳥自身が分泌する脂を塗る羽繕いという行動を紹介した上で、実際に羽に水を垂らす実験をした。子どもが喜ぶ、羽の表面ではじかれた水滴を運ぶゲームも体験してもらった。また、フクロウの羽に触れてもらって夜のハンターが羽音を立てずに飛べる理由を感じ、考えていただいた。

さらに環境教育に必要な知識という観点から、鳥の羽と我々哺乳類の毛の共通点を脊椎動物の歴史から学び、羽と毛の共通ルーツとして考えられるものは魚類の鱗であるなど、生物を知ることは自分を知ることである例を示した。

【まとめ】

参加者の感想や意見を交えながら、命や自然・地球や宇宙についてのクイズを実施した。そうして時間軸と空間軸を広げ、自分が何者であるかという認識を深めることは、自分と今のかけがえのなさを実感することに通じる。これは、参加者から出されていた希望「環境教育で、自己肯定感を育むようにしたい」への回答にもなった。環境問題への対応は厳しいこともあるし、長期的でなければならぬことから、気づいていない幸せに気づくという意味でも重要な事柄と思われ、そのきっかけになるワクワク、ドキドキはそこかしこにあるはずだとした。環境教育では文明の有難さと危うさを感じる必要があるのではないかと、そのためには自然の素晴らしさを感じるだけでなく、その厳しさも知るようにしたいと結んだ。



日常の現場や暮らしに持ち帰る“運営と振り返り”

実施者:加藤大吾(NPO 法人都留環境フォーラム)



【概要】

本ワークショップでは、自然体験プログラムの運営、そしてプログラム実施後の振り返りを、どう日常に持ち帰るかをテーマにスタートし、参加者の出したキーワードを元に様々な角度から自由なディスカッションが行われた。その中から出た「DSに勝つ！」(詳細は内容を参照)をキーワードに、実施者である加藤大吾氏のアクティビティ理論が熱く展開された学びの場となった。

【実施内容】

1) タイトルは決まっているが、実施内容は決定されていなかった。まずは加藤氏が日々の暮らしを写真記録で紹介した。自然と共生する持続可能な暮らしをどう実践しているか話した。そして、何故このタイトルに惹かれて参加したのかを2人1組で何度か組み合わせを変えながらシェアした。そして加藤氏より、実践しているプログラム終了後には、参加者の何が変容したのか、自己満足で終わっていないかを考えること、きちんとプログラム提供をし、体験してもらい、クライアントが体験を自分の現場に持ち帰ることが必要であると述べた。ここから、どんなことを知りたいか、学びたいかを話し合い、キーワードを付箋紙に記入して机に張り出した。

2) 出たキーワードは、「数字じゃない効果」「成果みえる化」「効果」「無目的」「正解が何か?」「感じたことを大切に」「現場と会議室がつながるには?」「実施側の振り返りポイント」「在り方」「人柄」「コミュニケーション」「ビジネス」「きっかけづくり」「仕事→暮らし」等であった。その中からランダムに選んだキーワードについて話をしていくうちに、「何も感じず、そこに自然があることに気づかない子どもが多いことが気になる。体験の時間が終わったとたんにDS(ゲーム)を始めてしまう。」という話題が中心となった。何を伝え、子どもが何を感じたら正解なのかという全員の疑問に、加藤氏は「アクティビティの中でそこが学びのポイントだと思ったらその場で運営を変え、そして最後の振り返りで全て抱む。コンテンツそのものではなくプロセスを見ていることが大事」と述べた。そしてそこから「DSに勝つ！」をテーマに加藤氏のアクティビティ理論が展開された。

3) 「DSに勝つ！」にはというテーマから、感情の曲線を扱うとい

うことに話が及んだ。感情の落差が大きいほど効果があるので、上がっている感情を意図的に落とす。その方法として①課題圧をかける②内圧をかける(チーム内で喧嘩をさせる)③外圧をかける(そんなのもできないのか、などとけしかける)一気に落とし、落ちた時には声をかけないといったテクニックへ話が及んだ。しかし、意図的に落とすことへの不安の言葉もあり、そこには、テクニック、経験、見る力も必要だがファシリテーターが落としても上がると信じていることが大事であり、信じなくなった時により下がってしまうとアドバイスがされた。

さらに「スタッフのまなざし」についての話では、課題の成功と失敗だけに囚われるのではなく、「Doing」「Being」「Space」の3つの視点からチームや個人の状態を捉えることが大切だと話した。Doing=課題解決機能(やり方・行動・手法・How to)、Being=集団維持機能(あり方・存在意義・関係性)、そしてBeingに裏付けられたDoing=信頼しているからこそ行動が生まれる。この3つを合わせてファシリテーターはプログラムを組み立てると良いという説明した。

4) その後は最初に出たキーワードを再度見直し、ディスカッションの時間となった。参加者がそれぞれの現場で抱えている問題や個人の課題をみんなで共有し考えた。最後まで答えの出ない、複雑な議題もあったが、考えを深める良い時間となった。

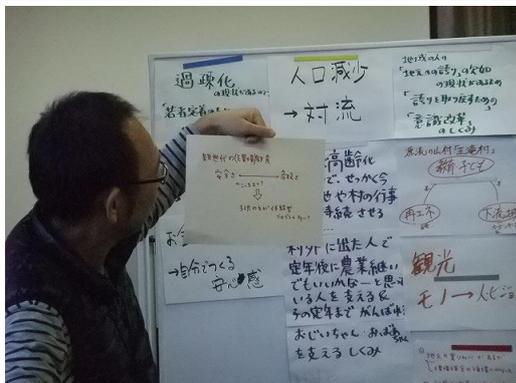
【まとめ】

最後の振り返りでは、「自分の日々の仕事に戻った時こやることが見えた」「現場に持ち帰るといことは難しい」「絶対に何かを持って帰らせるというモチベーションを取り戻した」「理論を元に、場数を踏んで自分のものにしたい」等、様々な感想が出た。参加者の課題を元に、1人1人がそれぞれに大きな学びを得ることができたワークショップであった。



持続可能な地域のための「しくみ」を考えよう

実施者：吉澤卓(特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J))
長岡素彦(ESD-J)



【概要】

本ワークショップでは、ユネスコにより推進されてきたESDの10年が終了する2014年度へ向け、広く環境教育の関係者に対して、どうアプローチをするとESDの話の輪に加わってもらえるのか、という視点から企画されたものである。

参加者それぞれの視点から「地域の課題」を抽出し、それを解決するために必要な「持続可能な地域のためのしくみ」とは何かを考えることを軸に据えて、ESDの最新情報提供をきっかけにし、参加者同士でアイデア出しと意見交換の時間とした。

【実施内容】

前半：ESDの最新情報提供

- ・高度経済成長以降、地域の荒廃や弱体化が進み、地域社会や人々の暮らしが成り立たなくなっている。一方で、近年は全国各地でのまちづくり・地域づくり事業など、持続可能な地域を志向する動きが多方面で起こっている。

- ・今、日本ではSD(持続可能な開発)とそのためのESD(持続可能な開発のための教育=人づくり)の推進が求められている。しかし、一般にESDという概念が浸透していないのが現状であり、この概念を広めるためには持続可能な地域を目指す人々の全面的な対話と、持続可能な社会のための「しくみ」を実現させることが必要不可欠である。

- ・ユネスコが2015年以降のESD推進の枠組みとしているグローバルアクションプログラムとその中で優先される5つの分野(①政策的支援②機関包括型アプローチ③教育者④ユース⑤地域コミュニティ)について、日本の国内の視点で今後どんな点がESDとして重要なのか、ESD-Jがネットワークする国内の事例を交えながら課題、目指すべき方向性についての情報提供を行った

後半：地域の課題の視点抽出とその課題解決のための「持続可能な地域のためのしくみ」をテーマとした参加者同士のディスカッション

導入部で参加者が話題にしたい、持続可能な地域のための「しくみ」について、「こういうのがあれば良いのでは」と思うことを各自紙に書き出し、各々が簡単な説明を行った。その後、参加者が

話題にしたいテーマを選び、近いテーマ同士がグループとなり、意見交換を行った。

参加者からは、「人口減少を食い止めるためには、まずは都市と地域を行き来する「対流」の流れを作ることが大切ではないか」という意見、伝統知(田舎の知恵)について、山菜採りなどの“現代でも必要な知恵”と草鞋編みなどの“現代でも必要とされない知恵”をどう扱うのかという話、そして、地域がもともと持っている、科学や市場経済に頼らずとも回る仕組みを活かす方法など、多様なテーマが挙がった。更に、そこから3つのグループに分かれ、先ほどのテーマをもとに意見交換と議論を行った。

ここでは、「子供に地域のマップ作りをしてもらう取組み」「田舎と都会のどちらの暮らしをとるか考えることのできる仕組みづくり」「集落を無理に維持しない、看取ることを考える」といった幅広いテーマが扱われた。

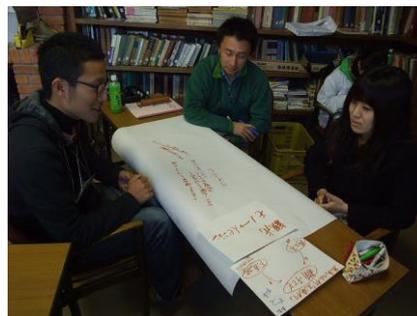
また、ディスカッション中も具体的な提案、それを実践するにあたっての問題点、地域おこしについての苦悩や、地方にありがちな困った事情についても話されており、同じ分野に関心を持つ人々が話し合う、貴重な交流の場となった。実施者も混ざり、他の地域での事例なども提供した。

【まとめ】

このワークショップでは広く、「持続可能な地域のあり方、そのための必要なしくみとは」という視点で意見交換された。多くの話題は、「人づくり」についてのアイデアや意見であり、ESDの重要なテーマである「地域の未来を担う人材育成」という視点で対話された。

また、持続可能な地域づくりのためには、自分の価値観の確認や他者との合意形成をすることが必要不可欠であり、ESDとして広く地域が持つべき視点であると再確認された。

実施者側の成果としては、今後、地域の課題解決に関心のある層に対して、地域全体の課題解決にみんなで知恵を持ち寄り、関心を持ってもらい、対話の機会を持つという方法が有効であるという視座が得られた。今回の参加者の皆さんには、意見交換から得た視点を今後の活動に活かしていただき、「地域の未来を担う人づくり」が地域再生の重要な要素なので、グッドプラクティスも参考にしていれば嬉しいと述べた。



継承したい日本の自然観～自然体という生き方～

実施者: 新田章伸(NPO 法人里山倶楽部)



【概要】

本ワークショップでは、グローバル化に伴う価値観の均一化が進む現代で、失われつつある日本人が持つ「日本の自然観」を講義やフィールドワークを通じて学んだ。屋外に出ることで五感をフルに使って自然を感じることができた。ワークショップを通じて、自分自身の中に生きる自然を意識することが、環境教育にもつながるということを共有した。

【実施内容】

1) 話題提供

はじめに、話題提供として「継承したい日本の自然観」の紹介を日本の自然観実践研究会の最新冊子を使いながら行った。かつての日本人は、目先の利益や快適な生活に惑わされること無く、先祖伝来の自然の見方や接し方を大切に「自然体」を良しとする生き方をしてきた。しかし、西洋文化の流入により、そうした日本人の生き方が失われつつある。その意味に気づき、温故知新において伝統的な自然観の価値を再認識することが重要になっている。実践研究会では、その日本の自然観をこれからの暮らし、生き方につなげていくことを提唱している。具体的な実践事例として、里山で子どもたちと自然を体感する通年プログラム「里山キッズクラブ」や、自然観察活動を行うリーダー養成を目的とした「自然観察インストラクター講座」等を長年実施している。

2) フィールドワーク

実際に「日本の自然観」を醸成するワークを体感するため、フィールドに移動した。ここでは自然の対象物を選び、A4のシートに観察(スケッチ)と詩・俳句づくりを行った。観察は自然物のスケッチに加えて、そこに「気づいたこと(事実)」と「考えたこと、思ったこと」を記入した。詩・俳句づくりでは「感じたこと」を文字に起こすことに挑戦した。理性と感性の両方を駆使して自然と向き合うことが目的である。また、このワークを行う上で1つだけルールが設けられていた。それは、誰かと一緒に行わず自分自身のみでスケッチと詩・俳句づくりを行うというものであった。参加者は説明を聞いた後、雑木林の中へとそれぞれ入っていった。また、参加者は気に入った自然物が見つかったと、茂みにしゃがみこんだり、

丸太に座ったり、落ち葉に寝転がったりしてじっくりと自然と向き合う時間を持った。風が吹き付け寒い中であつたにも関わらず、集中しワークを行っていた。

屋外でのワーク後、室内に戻り参加者は半分に分かれ、記入したシートを回して見せあつた。季節外れのたんぼぼをスケッチした人、落ち葉からいのちの巡りを詠んだ人など、人それぞれに見方や感じ方が異なることを楽しんだ。その後、4人1組ほどでワークの感想をわかちあつた。「だんだん自然の中に自分が溶け込んでいくような気がした」「子供の頃に戻つたような気分になつた」等の感想が述べられた。このワークを通じ、「継承したい日本の自然観」の中で大切にしている、理性と感性のバランスの良い見方、感じ方について体験的に学ぶことができた。

3) 感想、意見の交換

A4紙にワークショップの感想を記入後、参加者同士で感想、意見の交換を行った。「屋外のワークは寒かつたが、普段なかなかできない体験ができたのでとても楽しかつた」「今回だけではなく四季ごとにこのワークを行いたい」といった感想が聞かれた。また、「日本は土地によって自然も気候も大きく変わるが、それでも似たような自然観を持っているのはその根底に「いのち」や「季節の移ろい」があるからなのではないか」の意見も聞かれた。

【まとめ】

「日本の自然観を継承する」ということは「暮らしの中に自然を活かす」「自分自身の中に自然を意識して生きる」ということである。それは日本古来の伝統的な生活様式でもあり、同時に現代では希薄になりつつある。効率化や利便性だけを求めるのではなく、時には立ち止まることで季節の移ろいや周囲に溢れる自然を感じ、心を育むことも大切である。グローバル化が進む時代であるからこそ、日本人が継承してきたアイデンティティを再確認することが重要であり、後世にも受け継いでいく必要がある。



事例から学ぶ ESD(持続発展教育)の基本と実践

実施者: 笹谷秀(株式会社伊藤園 取締役 CSR 推進部長)

小川愛実(株式会社伊藤園 CSR 推進部 CSR 推進室)



【概要】

本ワークショップは、伊藤園グループにおける CSR の取り組み事例の紹介を中心に展開された。2010 年 11 月に国際規格 ISO26000 「社会的責任に関する手引」が発行されたことで、企業における CSR の潮流が変わり、「本業 CSR の時代」に入ったことを、同社の取り組みをステークホルダーとの協働事例をもとに参加者と考えた。

また、グループワークとして北海道江別市の小麦の産官学による事例などを紹介し、企業や自治体など多様な関係者との協働による持続可能な発展のケーススタディを行い、ISO26000 の理解を深めた。

【実施内容】

1) CSR 新時代について

2010 年 11 月に国際規格 ISO26000 が発行されたことで CSR の潮流は大きく変わった。この規格では社会的責任を「組織が法令を順守して関係者の意見をよく聞きながら本業を活用して実践する、社会・環境の持続可能な発展に貢献するための活動」とし、慈善活動等ではなく、企業が本業を活用して実践するとしている点が重要であると笹谷氏が述べた。さらに「CSR から SR へ」、つまりは企業や行政、NPO という枠組にとらわれない社会的責任を果たす活動が求められる時代である。行政ではキャラクターを使ったり、道の駅を活用したりする「プラットフォーム形成型」の手法を、企業の事例としては、東京の新ランドマークの東京スカイツリープロジェクト、ハイブリッド・カー、新しい調理家電などが提示された。

これらの事例は企業、関係者、社会環境にそれぞれに良い関係が生まれることを目指したものであり、日本流に照らすと、近江商人の哲学である「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方よしの考え方に通じるものであり、今回の主題である「本業 CSR」を理解する土台となった。

まずは、本ワークショップのスタートとしてこれらの認識を参加者と共有した。

2) 伊藤園のバリューチェーン活用の CSR 事例紹介

本業 CSR の理解を進めるうえで、笹谷氏が取締役を務める伊藤園の事例の紹介に移った。コミュニケーションのために作られた報告

書の特徴を活かし、CSR 報告書 2013 コミュニケーション編を素材に参加者が感想を述べ合った。特に、同社では「茶畑から茶殻まで」との考え方を基本に本業でのバリューチェーンを活用しながら以下の取り組みを行っている。

「茶産地育成事業」

原料調達の一部について、契約栽培方式と新産地事業により、生産者にとっては農業経営の安定化、大規模化・IT 化、後継者確保、地域社会にとっては、雇用創出、地域活性化、環境保全、当社にとっては原料の安定調達、品質向上などのメリットが生まれている。

「茶殻リサイクルシステム」

飲料製造工程で発生する茶殻のリサイクルについても、大部分は農業の堆肥、肥料などに利用するが、一部は日用品の製造を異業種企業とコラボしている。これら企業にとっては付加価値製品の製造販売、社会・環境にとっては二酸化炭素排出の抑制、省資源、製品付加価値、当社にとっては処理コストの削減、二酸化炭素削減などの効果がある。

これらが、伊藤園の本業における、関係者との協働で「三方よし」の共有価値が実現している事例である。

3) グループワーク

ここまでの講義を踏まえ、CSR (ISO26000) の理解を深めるべく具体的な事例研究のグループワークが実施された。

提示されたのは「道の駅事業」「幻の小麦でつながる地産地消のネットワーク(北海道江別市)」「パリのレンタサイクルシステム、バリブ」「地域おこし協力隊」などであった。事例の全ては「多様な関係者との協働による持続可能な発展」の形であり、関係者それぞれが「Win-Win-Win 関係」のトライアングルにおいて「企業」「社会・環境」「関係者」のような役割を担い ISO26000 における本業 CSR を達成しているのか、参加者それぞれの立場から議論が交わされた。

【実施内容】

本ワークショップには企業へ勤める方も多く参加しており、取り上げた本業 CSR への関心の高さや ESD の手法によりワークショップから「気づき」が生まれる様子がうかがえた。CSR 活動の先進企業である伊藤園の事例には学ぶところが非常に多く、「多様な関係者との協働による持続可能な発展」ISO26000 の理解を深めることができたワークショップとなった。



ゲームで生態系を学ぼう！

実施者：奥宮健太(BEANS BEE)、日鷹一雅(愛媛大学 環境 ESD)



【概要】

このワークショップでは、生態系という視点で自然に対する理解を深めてもらい、参加者が、それぞれの環境教育の現場で活かしてもらうことを目的とした。

河川の地形を表したボードと、河川に生息する生き物を表したコマを使い、ゲームを行いながら生態系について学んだ。ゲームでは、5~6人が1グループを組んで行われ、各プレイヤーが、モズ、ヤマトシジミ、シロツメクサなど、生態系を構成する生き物の役割を担い、河川の地形のボードにそれぞれの生き物のコマを増やししながら、生き物の視点で生態系について理解した。振り返りでは、参加者がワークショップで学んだことを共有した後、ゲームを使って、生態学の考え方など紹介した。

【実施内容】

1) ゲームの構成

ゲームは5~6人が1グループを形成して行われる。ゲームに使用するボードには、水面・湿地・平地・高地・道路の5種類の環境条件で色分けされたマスが河川をイメージしてそれぞれ配置されている。一方で、モズ・ダルマガエル・ヤマトシジミ・コバネイナゴ・オギ・シロツメクサの生態系を構成する、6種類の生き物が描かれたカードが各プレイヤーに1種類ずつ配布される。生き物のコマを生息条件にあわせて動かしながら、地形のボード上に各自担当する生き物のコマを増やすこと（繁殖させること）を目指した。

2) ゲームの進行

ゲームは、実際の生態系の仕組みに準じて進められる。生物によって生息可能な環境条件や捕食と被食の関係、可動範囲、あるいは繁殖の仕組みも異なっている。例えば、オギはシロツメクサを侵食して生息範囲を拡大できる、モズは1回の移動につき他の動物を3匹食べないと生き残ることができない、といった条件がある。どこに生息範囲を拡大し、どの生物を捕食するか、といった判断は各プレイヤーに委ねられており、時に生き物が地形のボード上からいなくなる（絶滅すること）もあった。

3) ゲームの振り返りと共有

実施者の指示でゲームを途中で区切り、振り返りの時間を設けた。生態系バランスの重要さへの気づきや、ゲームの内容が現実には起きている可能性への危機感、人間の自然への関与に対する是非など様々な意見が寄せられた。

参加者の感想は次の通りである。

- ・全ての生物が生息しているから、全ての生物が生きていけるのだと実感した
- ・全体のバランスが大切だと感じた
- ・生物が1種、絶滅すると他の生物も相次いで絶滅した
- ・誰と協力をし、敵対しているか、可視化されて分かりやすく、意識もする
- ・他の生物を担当していたら違った視点の気づきがあった
- ・他の生物を侵食（捕食）するのを申し訳ないと思いつつも、自分が担当する生物を生き残らせることに必死になっていた
- ・他の生物が生きていくために、自分の担当の生物が食べられるしかない意識した
- ・繁殖第一か共生第一なのかゲームに参加者の意識によって結果が大きく異なる
- ・生息地にバラつきを持たせ、地区ごとのバランスを保つべきだ
- ・ゲームだから絶滅をしても新たにカードを出すことが出来たが、現実にはそうはいかない
- ・ここに人間のカードがあったらどうなっていたかを考えた
- ・人間が河川に橋を架けたり、道路を開通させることで生きていけなくなる生物もいれば、新たに生きていける生物も出てくるかもしれないと考えた
- ・ある特定の種が増え過ぎは良くない。時に人間の手も加えるべきなのかもしれない
- ・ゲームが始まる前と体験した後とでは、マスボードを見て感覚が生物視点になっている

【まとめ】

生態系の構造は、食物連鎖（food chain）や生態系ピラミッドといった言葉で表現される単調な仕組みではなく、実際には食物網（food web）と表現されるように多くの生物同志が複雑に関係しあう仕組みである。本ワークショップはゲーム体験によって、その構造を参加者が実感し、参加者の意識にアプローチできる点で、納得感が高かった。参加者は、担当する生物になりきることで、多角的な視点で「共生」「すみわけ」「循環」「捕食と被食」などの自然の仕組みを理解することが出来る。ゲームで養った感覚を参加者それぞれの活動に持ち帰り、さらに一歩踏み込んだ考え方や活動に発展することが期待される。

ウィルダネス ファーストエイド ～仲間を守るその技術

実施者：豊田啓彰(一般社団法人 ウィルダネス メディカル アソシエイツ ジャパン)
本杉美記野(公益財団法人キープ協会)



【概要】

本ワークショップでは、二次救命処置に引き継ぐまでに時間がかかる自然の中での救命措置を想定したウィルダネス・ファーストエイドの概要説明や体験を行った。通報後直ぐに救急車が駆けつける都市部を想定した一般のファーストエイドとは異なり、傷病者の処置前評価に重きを置くコンセプトの救命法である。ウィルダネス・ファーストエイドを体験学習法で学んだ参加者は、野外での救命法の特異性や難しさに戸惑いながらも、その必要性を強く感じたようであった。

【実施内容】

1) ウィルダネス・ファーストエイドとは

通報から平均 8.2 分で救急車が駆けつけるような都市部とは違い、森や山などの自然の中では救命士による救命処置や設備の整った病院で医師の治療を受けるまでに非常に長い時間を要する場合が多い。また、傷病者が防寒具やバックパックを装備している場合や、倒れている場所も平坦な場所であるとは限らない。そのような状況下で、一般の講習会などで習得できるファーストエイド法がそのまま通用するケースは稀である。ウィルダネス・ファーストエイドとはそのような自然の中でケースを想定した一次救命処置であり、一般のファーストエイド法の知識だけでは対応しきれないケースや様々な野外特有のケースを補完する救命法である。この救命法の特徴は、傷病者の処置を行う前に三段階にわたる評価を迅速かつ確実に行うことである。

2) 傷病者の評価

ウィルダネス・ファーストエイドでは、以下の三段階にわたる傷病者の「評価」を全て迅速かつ確実に行った後で初めて、適切な処置を施す。

一段階目：現場や状況の評価と安定化

安全（救助者、傷病者、オーディエンス等）、傷病者の数、傷病の原因

以上は、傷病者に近づく前の段階で評価する。

二段階目：いのちに関わる問題の評価

呼吸器系（呼吸の有無）、循環器系（脈拍の有無）、神経系

三段階目：本質的に問題を評価

全身の確認、バイタルサイン（呼吸数、脈拍数など）、

SAMPLE（問診）

（SAMPLE とは、Symptoms: 症状, Allergies: アレルギー, Medication: 薬, Pertinent history: 既往歴, Last Ins and Outs: 最後に摂取した食べものと最後の排泄物, Events: 起こった事、以上の問診項目の頭文字を纏めたもの）

3) 実習

ワークショップの後半は、参加者がそれぞれ救助者役と傷病者役に分かれて屋外でのウィルダネス・ファーストエイドの実習を行った。実習は2人1組で行い、救助者は傷病者の抱えている問題を知らされていない状態での救助となる。1回目の実習では、傷病者は木から転落して手・足の解放骨折と出血、腹部に圧痛を伴う重度の内出血があり、さらにパニック状態であるというシチュエーションで行われた。傷病者は出血及び内出血想定箇所には「出血」と書かれたテープを張っている。救助者は三段階の傷病者評価を全て行った上で命に関わる重篤な傷病から処置しなくてはならないが、すぐに目につく手足の怪我に惑わされてしまい、三段階目の評価：全身の確認を失念して腹部の圧痛を伴う内出血を見つける事が出来ずに傷病者を救えないグループが多かった。救助者役と傷病者役を入れ替えた2回目の実習では、傷病者は山中で2日間道に迷い疲労と空腹で衰弱し、さらにナッツアレルギーを持っているというシチュエーションで行われた。ここでも傷病者の空腹の訴えに惑わされ、三段階目の評価：SAMPLE（問診）を失念したままピーナツチョコレートを食べさせ、傷病者をより重篤な状態に陥らせるグループが多かった。実際の評価と処置の難しさに参加者からは「なす術が無かった」などの声がかかれた。

これらの実習はいずれも傷病者の評価を適切に行わなければ、発見しやすい傷病に隠れたより重大な症状を見落としかねないという教訓である。すぐに二次救命処置に引き継げる都市部ではあまり問題にならないかもしれないが、引き継ぐまでに長い時間を要する恐れのある自然の中ではこれらの見落としが傷病者の生死を分ける分水嶺となってしまうかもしれないのだ。

【まとめ】

実際にウィルダネス・ファーストエイドを実習して既得のファーストエイドとの差異や評価の難しさを体験した参加者からは、パニックになってしまった、判断が難しいと言う感想や、自分のフィールドでも試してみたい、体験学習法によるリスクアセスメントで大変意義のあるワークショップであったなどの意見が寄せられた。

パフォーマンス評価の世界の潮流

実施者: 高木幹夫(日能研)、田中義郎(学校法人桜美林学園 桜美林大学)

エヴァ・ペーカー

(National Center of Research on Evaluation, Standards, Student Testing (CRESST))

ハリー・オニール(USC 共同研究者)



【概要】

今日、教育活動の様々な場面において、子どもの「考える力」の育成が求められている。本ワークショップは子どもの思考力や判断力、そして表現力を育成し、評価する手法の1つとして注目されている「パフォーマンス評価」がテーマである。アメリカより2人の講師を招き、パフォーマンス評価とその可能性について最新の研究成果をもとにした講演を中心に、質疑応答や参加者同士の活発な議論によってパフォーマンス評価への理解を深めた。

【実施内容】

1) エヴァ・ペーカーによる講演

学校における大規模な学びに対して、近年はインフォーマル(小規模)な学びがより重要性を持つようになった。インフォーマルな学びは継続的な学びのきっかけとも言うことができ、学びの状況に応じて環境を調整するために有効とされる形成的評価に深いつながりを持つ。形成的評価は、そうした学びのうちにすでに起きているものである。そのため、適切な評価を行うためには、子どもたちに起こりうるあらゆることを予見し、モデルをつくり、その想定を評価基準のうちに盛り込む必要がある。そして子どもたちに学びの内容や明確な目標を示し、ともに学びをつくっていく協力者とするのである。また、子どもたちが学びを得るだけに留まらず、子どもたちが得たスキルについて、何か別の新しい問題を提示することが重要だ。これによって学びを違う分野にも転移し、応用することができるかを確認することができる。現代の社会はめまぐるしく状況が変化し、子どもたちを取り巻く環境は非常に不安定である。このような評価方法とそのフィードバックにより、子どもたちは急激に変動する世界を生き抜くための学び続ける力を身につけることができると考えられる。

2) ハリー・オニールによる講演

科学技術を教育に導入する仕組みが出来つつある。アメリカにおいて、小論文やポートフォリオなどの実技パフォーマンスを、コンピュータープログラムによって評価する仕組みが取り入れられ始められている。コンピュータープログラムによる評価では、

評価者に依存する評価のぶれを無くし、より迅速な評価を出すことができる。もちろん、その信頼性や有効性、公平性の面や費用の面にはまだ課題が残り、実情に応じた工夫が必要である。しかしそれ以上に期待は大きい。パフォーマンス評価は、従来の内容理解を中心に置いた評価方法とは異なり、認知的学習モデルをベースにした手法となる。学びの成果を評価する、より高次元の思考を試すものである。そしてパフォーマンス評価をより有効に実践していくためには、内容が透明性を持っていて正確であること、またその内容が21世紀型スキル(これからの社会を生き抜く為に必要な力)を得ることのできる多角的なものであることなどが重要になる。21世紀型スキルの中でも特に、順応的問題解決力は欠かせない。これは内容理解や問題解決のための戦略、メタ認知的自己モニタリングなど複数の要素から構成され、それぞれに測定することが可能だ。アメリカでは現在、こうしたパフォーマンス評価の結果を利用して、教員を評価しようとする動きもある。それほどまでに、パフォーマンス評価は重要視されているのである。

【まとめ】

パフォーマンス評価は、これまで測りにくいとされていた思考力・判断力・表現力を評価する、高次の試行を要求する。この評価手法を導入することで、変わりゆく現代を生き抜くためのスキルを子どもたちが身につけることが期待されている。参加者には環境教育や体験型学習を実践していたり、関心をもっている方が多く、自身の経験を踏まえながら講演を捉えている様子であった。



15年のノウハウ伝授！身近な素材でプログラムづくり

実施者：小西康雄(東京ガス環境エネルギー館)、相良香子(東京ガス環境エネルギー館)
鈴木創(東京ガス環境エネルギー館)、丸山瑛奈(東京ガス環境エネルギー館)



【概要】

身近な素材の1つであるゴミを取り上げたプログラム「実践！ゴミダイエツト道場」の制作過程説明と実施を通して、素材の理解の視点や方法や思考を整理するためのシート類を紹介する事により、普段の生活の中で当たり前「無意識」に行っている行動を「意識化」する伝え方のノウハウを伝えた。

【実施内容】

1) 環境エネルギー館とは

環境エネルギー館は、1998年、東京ガスの都市型環境学習施設として生まれた。「地球大好き人間の輪」を広げるといふ目的を掲げ、子どもたちが環境問題を正しく理解し、自ら考え、行動するための環境学習の場を提供してきた。24名のインタープリターが、現場の対応からイベント・プログラムの企画、制作、運営までを行っている。

2) プログラム作りについて

エネルギー館には72のプログラムがあり、PDCAサイクルに基づき、常にブラッシュアップを行っている。その多くは、ゴミ、電気、水など参加者の日常生活に関わる身近なテーマを取り上げている。日常に当たり前存在するテーマであるからこそ、見せ方、伝え方によって、参加者の心を動かし日常の中での行動につなげることができる。

まず、プログラムを作る際には現状の課題を洗い出し、必要なプログラムを考える。そして、素材の理解を深める事がプログラムを作る上で重要であるので、書籍や行政資料を活用して情報を収集する。

プログラムに登場するミミズの素材理解の体験として、エネルギー館から持ってきたミミズの観察を行った(観察のヒントとして別プログラムで子供がミミズについて発見した事をまとめた物を紹介)。

さらに、プログラム参加者が、「ゴミ」と「ミミズ」についてどの様な知識があり、どの様に考えているかを知る事は、参加者の思考に沿ったプログラム実施のために不可欠であり、教科書や学

習指導要領などを用いる事も効果的である。

次に、集めた情報を整理するために使用している「企画シート」について説明し、自由なテーマで企画シート制作を体験した。

そして収集した情報を元にしたプログラムの組み立て方の紹介をした。参加者が「自分達に出来る事を考え、行動する」という目標を達成するには、参加者の思考に沿い、(ゴミについて)気づく→興味・関心を持つ→そして理解するという段階を経て、プログラムを組み立てる事が効果的である。その結果、自分に何が出来るかを考え、無意識に行っていた「ゴミを捨てる」事が参加者の中で意識化され行動の変化へとつながると伝えた。

以上の過程を経たプログラムを紹介するため、「実践！ゴミダイエツト道場」の実施した。

①横浜市を例にどんなゴミが出ているか、リサイクル可能かをQ&A形式で説明

②一番割合が多い生ゴミに注目。生ゴミを処理する「スーパー生ゴミ処理機」として、ミミズが登場。循環の無駄の無さを知る。しかし、明日から誰もがミミズを飼える訳ではない。そこで、私達に出来る事はないのかを考える。

③生ゴミを減らすアイデアの共有を行う。食べられる分だけ用意する、無駄なく使う、水気をきる、残さず食べる、といったその日からでも実践出来る事を参加者と考える。

プログラム実施後、参加者に振り返りを書いてもらい改良した点を紹介した。

3) 環境エネルギー館の成果

学校の社会科見学の間だけでなく地域ではトンボの分布調査など、行政との協力、家庭では親子で環境について楽しみながら学ぶ場所として「地球大好き人間の輪」を広げてきた。その成果として、常連の学校や来館者が多くいる事、来館者の声や様子を紹介した。2013年度3月をもち閉館するが、豊洲にある「ガスの科学館」に一部展示やプログラムを移管して環境教育を引き継いでいく。

【まとめ】

プログラムが実施され、体験し、触れ合え、意見交換ができた。実際に使う企画シートや、館で飼育しているミミズが連れて来られ、実際のイメージがつかみやすかったと感じられた。素材の理解、対象者理解という言葉がワークショップの中で多く聞かれた。この理解度が深ければ深いほど、参加者が楽しみ、楽しむことで興味関心を刺激し、地球や環境について考えることに繋がる。実施者、参加者共に笑いや納得の声が多く聞こえた雰囲気の良いワークショップとなった。

小学校で環境教育をやりたい人 集まれ！

実施者: 佐藤敬一(東京農工大学順教授)、大石智啓(東京農工大学 佐藤研究室)



【概要】

本ワークショップでは実施者である、佐藤敬一氏がPLT (プロジェクトラーニングツリー)、WILD (プロジェクトワイルド)、WET (プロジェクトウェット) の視点から、小学生に対して行った環境教育について紹介した。

実際に「木」をテーマにしたアクティビティ体験や講義を織り交ぜながら「木」についても詳しく学んだ。

【内容】

1) PLTのアクティビティ実施

まず、テーブルの上に置いてある13個の日常品 (①箸、②コルクボード、③コルク、④山椒、⑤メイプルシュガー、⑥バニラエッセンス、⑦ティッシュ、⑧ダンボール、⑨スポンジ、⑩サングラス、⑪セロハンテープ、⑫アスピリン (薬)、⑬発泡スチロール) は木が使われているのか、○か×で一つずつ答えていくアクティビティを実施した。日常的に使用しているものに目を向け、普段と違う視点から木を見ることができた。

2) アイスブレイクの体験

外に出てアイスブレイクを行った。まず出身地のアンケートや誕生日の順番に並ぶなどのアクティビティを行い、楽しみながら緊張を解いていった。

そのあと、WILDのアクティビティである“オーディア”を実施した。“オーディア”とは「鹿」と「生息地の要素」(食べ物・水・かくれ場所)に分かれ、体を動かしながら鹿の個体数の変動について学ぶことができるアクティビティである。

続いて、“価値観のラインナップ”というアクティビティも実施した。このアクティビティはまず、お題に対して自分の評価を1~10の数字でつける。賛成なら10、反対なら1。評価の数字の順番に一列に並ぶ。お題の中には「小学校の教科として環境教育を導入すべきか」というものもあり、参加者からは「難しい」という声も聞かれた。

このアイスブレイクの中でも小学生に対する環境教育をどうするべきかを考える時間となった。

3) PLTの体験

PLTは小学校を対象として木の基礎知識として、構造と役割を理解するための体験型プログラムである。実際に小学生で実施している内容で講義を受けた。わかりやすい図を使い、アクティビティをしながら木の構造や役割を楽しく学ぶことができた。

4) 小学校への環境教育について考える

3年生から6年生まで学年別にどのような環境教育のテーマが適しているのか、実際に小学生に佐藤氏が行っている活動を基に経験談を入れながら話した。適しているテーマとして、3年生は「五感を使う」(カモフラージュなどのアクティビティ実施)・「生物多様性や生態系」。4年生は「ゴミ」や「水」。5年生は「森林・林業の学習」。6年生は「環境に対するグループに分かれて検討」・「ワークショップ」である。

小学校に対する環境教育は一度だけではなく、継続的な活動が必要である。そうすることで、環境教育を特別なことにするのではなく、日常的なものにすることができ、自然環境ということを身近に感じることができるようになる。途中で、実際に小学生が作った「木」をテーマにした1分間のスライドを紹介した。佐藤氏の授業を受けた小学生が作成したスライドで、授業の内容をまとめたものであった。

最後に、ワークショップ参加者に対して、小学校の環境教育についてのアンケートを行った。また、「実際に小学生で環境教育をやったことがあるか」と「今から期待できる小学校でできる環境教育とは」という2つのテーマについて参加者1人ずつ意見を発表した。3時間という時間だったが、話を深めたい内容となったため、次の日の当日募集ワークショップにエントリーして講義の続きを行うことになった。

【まとめ】

小学生に環境教育をする場合、一度だけの環境教育(自然体験)にするのではなく、継続的な学びの場にする必要がある。継続的に行うことで、環境ということが身近に感じることができるようになる。そのためには、PLTやWILD、WETなどの知識や経験が必要であり、学生や市民を主体とした学校支援グループを立ち上げる必要がある。



伝える技術 KP 法(紙芝居プレゼンテーション報)

実施者：川嶋直(公益財団法人キープ協会)



【概要】

本ワークショップは、KP 法(紙芝居プレゼンテーション法)を学び実践し、伝える技術を向上させるためのワークショップであり、講師はKP 法考案者の川嶋直氏によって行われた。最初に、KP 法を使った講義があり、その後参加者も KP 法を使い、自分の興味あることなどをテーマに発表し、参加者同士で発表の良かった点や改善点を話し合った。

【実施内容】

KP 法とは、「書く・話す・見せる」を基本としている。代表的な使い方は、ホワイトボードなどに伝えたい内容を書いた A4 サイズの紙を張り付けながら話す方法である。

実施者は最初に、KP 法の使い方は様々であることを説明するために、自己紹介、アンケート、思考整理に関して実演した。また、パワーポイントや KJ 法との比較から、文字のサイズ、色の使い方、マーカーの持ち方までの丁寧で興味深い説明に、参加者からは驚きの声が上がった。

次に、実際に紙に書いてみるということで、マーカーの持ち方、書き方練習を行った。その後、A4 サイズの紙 1 枚に名前や所属、今日の期待・目下の課題など 3 つの項目を書き、隣の人とペアになり 30 秒ずつ、互いに発表し合った。30 秒という短い時間であるために、字を大きくする人、内容を絞る人もいた。次に川嶋氏が「伝えるとは何か」、「教育とは何か」、「環境問題解決のために」などをテーマに、1 セット 3~4 分の KP を 10 セットほど実演した。参加者への質問や問いかけを KP に入れるなど、一方的に話し続けない形の参加型の手法を伝えた。参加者からの「KP 法にこんな方法はアリですか?」との質問には、「KP 法にはルールは無い」と答えた。感情を込めたプレゼンにはパワーがあり、聞き手の反応も良かった。KP の枚数は 5 枚×3 段で 1 セット 4 分くらいが、見やすさや長さ的に丁度良いと話した。

実際にプレゼンを作る前に、KP 法の基本技術や、作業手順の説明を行った。伝えたいことの絞り込み、聞き手重視(客観性を意識)という点から、1 セットに 1 つの話で 10~15 枚を使用。手書きに

くする、下書きをする、使用するペンの色について、1 枚の紙に書文字の分量、紙の余白について、イラストや記号を使うと良いなどの細かい技術の指導まで行った。参加者は 5 つのグループに分かれて KP の作成と発表をおこなった。なかには、小さくした KP で構成を考える人や下書きを何度も見直し、書き直す人、聞き手になったつもりで自らの作成物を見直している参加者が多く見られた。作成が早く終わった参加者は、KP をホワイトボードに貼る際の板磁石の切り方やその価格、ホワイトボードが無くてステンレステーブを使うことで壁があればどこでも KP 法が使えるといった実践的な説明を受けた。

参加者の発表では、台本が無くともすらすらと話す人が多く、聞き手の目を良く見て、双方向的なプレゼンを行っている姿が見られた。紙を貼ったり、はがしたりするので発表に動きが付き、いきいきと話している方が多く、雰囲気も楽しそうであった。KP 法はプレゼンを作る段階で、どんな話をどこまでするかを考えるため、発表練習をせずとも、時間内で終わることができる人も多かった。各発表後には、良かった点や改善点などをフィードバック用紙に記入した。この用紙には「気付いたことを遠慮せずに書くこと」がルールだったので、発表者は聞き手からの素直な印象を聞くことができた。その後もより上手く伝えるためにはどうすれば良いか、などの話し合いが自然と各グループで起きていた。参加者からは、「KP 法はアレンジがたくさんでき、奥が深く面白い」、「今度使ってみよう」といった声が多数聞こえた。

【まとめ】

川嶋氏は KP 法の良さを「気持ち伝わること」「繰り返し使えること」等であると話した。併せて、KP 法の弱点として、聴衆の規模の限界などを挙げた。また、参加者から、ホワイトボードに紙を貼る際の立ち位置についての詳細な部分に質問がおよび、参加者が KP 法について理解、技術の習得ができたことを感じた。最後に、「伝える」ということにおいて特に注意しなければならないのは、「まず結論をいうこと」「様々なプレゼンテーションをたくさん見て、良い点悪い点から学ぶこと」であると話した。



2 日目

全体会 2

全体会 2 テーマ：「環境教育に関わる諸団体から最新のメッセージを聞く」

司 会：(公社)日本環境教育フォーラム理事 川嶋 直

1. 経団連自然保護協議会 松本 邦康
2. 日本環境教育学会 阿部 治
3. 認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)
村上 千里
4. 環境省 環境教育推進室 木邑 優子、山品 加奈子
5. NPO法人自然体験活動推進協議会(CONE) 安藤 伸彌
6. NPO法人日本エコツーリズムセンター 森 高一
7. 公益社団法人日本環境教育フォーラム 瀬尾 隆史
8. ジャパンGEMSセンター 柴原 みどり、高木 幹夫

(敬称略)



2日目 全体会2

「環境教育に関わる諸団体から最新のメッセージを聞く」

＜コーディネーター＞ 川嶋直(公益社団法人 日本環境教育フォーラム)

全体会2では、環境教育に関わる諸団体からメッセージを聞くという内容で、様々な分野の団体から話を聞いた。各団体は6分間それぞれ代表者が話をし、2団体発表が終了する毎に、聴講者は感想などを周辺にいる方々と共有した。

1. 経団連自然保護協議会 松本 邦康

始めに、松本氏は経団連自然保護協議会の概要を述べた。1992年、経団連自然保護協議会が発足し、同時に経団連自然保護基金がスタートした。この基金は、自然保護・生物多様性の保全に取り組む、自然保護団体などを国内外で支援する目的で開始し、21年続けている。支援プロジェクトの数は1,100に上る。その通算の支援額は32億円であり、この約75%は海外への支援である。特にアジア太平洋州が中心となっている。この詳細が掲載された小冊子も会場で配布された。

最新メッセージに関して松本氏は、

環境教育がビジネスとなるのか、環境問題に取り組む企業が取り組めば取り組むほどその業績が向上するのか、環境教育を学ぶ学生達に適正な仕事を与えられるのか、という視点で話された。

ビジネスというのは企業の本業である。本業では売上としてすぐに数値に出てくるが、自然や環境を数値に反映させることはなかなか困難である。様々な取り組みがされているが、「自然の価値はこれです」と言うのはなかなか出来ない。しかし、生態系の恵みは企業活動にとっては不可欠であり、水や空気、その他のあらゆる資源は自然の生態系から与えられている。そのため、企業による生態系の恵みに対する恩返しは不可欠な要素である。しかし、昨今金融危機があり、経済状況がまだまだ芳しくない中で、社会貢献やCSR活動はどうしても最優先には置かれられない状況にはある。

その中で企業は、遠い所に植林するよりも自分達の事業所の近くで出来ること、もしくは、自分たちの本業に関わることで、自然保護・生物多様性保全活動ができないかと考えていくことになる。

企業がそのスタンス、経営姿勢をどう変えるのかについて話された。

不祥事があり、行政指導が入ると変わるというのは典型的である。しかしそういう場合、実際は変わらない。何が変えるのかと言うと、消費者あるいは株主の行動やリアクションが企業にとっては一番の大きなインパクトになる。

林業ではFSC認証、漁業ではMSC認証などの認証制度がある。そういうものを組み合わせて企業に環境問題について真剣に取り組ませるためには、消費者が正確な知識を持ち、その製品・商品がどのように作られたのかを知る必要がある。そのような観点から、松本氏は環境教育がとても大切だと強く考えていると述べた。更に、松本氏は環境問題について色々話をし、取り組んでいく中で、温暖化も含めて環境教育の重要性を非常に痛感し、これからも立場は変わるかもしれないが、同じ方向に向かって一緒に取り組んでいきたいと述べた。



2. 日本環境教育学会 阿部 治

阿部氏は、日本環境教育学会の生い立ちとその活動について紹介を行った。

最初に日本環境教育学会の設立の話をした。日本環境教育学会は、27年前の環境ミーティングの際に集まった数名が発起人となり、3年間の準備期間を経て設立された。

清里ミーティングは学会を生み出した場であり、この場で学会の案内が出来るのが非常に嬉しいと述べた。そもそも環境教育という言葉が使われたのは1940年代である。国際自然保護連合の設立総会で、環境教育という言葉が最初に使われたと言われている。その後、欧米で環境教育が広がっていき、アメリカの環境教育学会は1971年に設立された。1970年にアメリカでは連邦で環境教育法律が作られた影響により、翌年に環境教育学会が作られた。この学会は最初、アメリカのみであったが、現在は北米環境教育学会と名を変え、非常に大きな活動している。日本環境教育学会は87年から準備をはじめ、90年に設立された。また、韓国でも90年に教育学会が設立された。環境教育は、環境教育のための活動や環境教育のための研究が目的ではなく、持続可能な社会を作るための手法等の研究を行っているのが環境教育である。様々な人が行っている、

様々な活動、実践があつてこそその環境教育研究であり、その実践者の方々と研究者の方々と結び付けて成果が出せるように、そのつなぎ役をしているのが学会である。

現在、会員は1400名くらいであり、その内訳は研究者が半分程度であり、あとの半分程度が幼稚園から小中高の先生方や役所の方々、NGOの方々、一般の方である。非常に職種の幅が広く、このような学会は他には類がない。環境教育者が日頃実践していることを持ち寄り、研究者と一緒にし、それを文章化し、論文の書き方等も毎年講習会を実施している。その中で数年前に出版したのが環境教育辞典や環境教育のテキストであり、さらに、原発事故の教材作りなど行っている。

毎年開催している学会は来年の8月1~3日の期間、法政大学にて開催される。そこでは一般の発表と同時に、関心のあるテーマで集まって話しをする自由集会を行っている。

さらに、実践者と研究者と一緒に進めていく研究も4~5本実施していると活動を紹介した。

最後に、学会は全く無縁ではないので、ぜひ関心を持って欲しいと述べた。

3. 認定NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議(ESD-J)

村上 千里

村上氏は、2014年ESD世界会議と2015年以降のESD推進に向けての状況の話をした。2005年から2014年まで国連ESDの10年が動いており、来年最終年を迎える。しかし、2014年でESDが終わることはない。リオ+20においても、ESDは世界中で今後もずっと続けていくものであると共有がされた。それを進めるにあたり、ユネスコがグローバルアクションプログラムというものを作っている。それはESDを進めていくために、いくつかの優先分野が定められており、それを各国、各団体がコミットメントを出し、世界中から集めたコミットメントをグローバルアクションプログラムとして世界会議で発表し、国連総会で採択されるという流れになっている。その動きの中で、2015年以降、ESDはどう進んでいき、日本政府がどう進めようとし、どんなコミットメントを出すのか注目していきたいと述べた。

次に、村上氏は、これから開催される持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議で行われる、ステークホルター会議と本会議について紹介をした。

ステークホルダー会議では、ESDに関わる様々なセクターがどのように世界でESDを進めてきたのかを共有して2015年以降につながるものである。その中で、ユネスコスクール世界大会やユース・コンファレンス、そして持続可能な開発のための教育に関する拠点の会議が行われる。この会議は、2014年11月に岡山でスタートする。

そして、持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議の本会議は2014年11月に名古屋で開催される。名古屋で開催された後、国の主催によって国内の会合であるフォローアップ会合というものがある。しかし、全て出演者が決まらず、村上氏のように、ESDに取り組んできた人たちが発表し、交流し、2015年に向けて議論をする公式の場を作っていくのがなかなか難しい状況にある。そこで、ESD-Jや世界の祭典推進フォーラムが公式イベントを東京で9月に実施し、フォローアップ会議や国のことをもっとオープンにしてより多くの人たちが関わりながら、2015年に向けた取り組みを共有できるようにしようと提案してい

る。ESD-Jでは、関わってきた多くの人たちが一緒にESDの10年を振り返り、これからに向けて提案を作るようなプロセスを作ることと考えていると述べた。

ESDの10年で何ができ、何ができていないかについて次のように述べた。

ESDに関する、様々な推進政策が文部科学省や環境省、自治体、教育委員会などで進められているが、それが国全体としてどのように進んでいるのか一目で分かる場所がないというのが一つの課題である。また、地域によって、取り組み度合や知識の面で格差がある。そこで、興味深い取り組みを紹介しながら、活動をしてもらえる地域や団体を増やしていくのが課題である。

そして、政府にはこれまで実施してきたことをまとめるジャパンレポート作りを行って欲しいと考えており、全体像が見えるポータルサイトを作ることを提案している。

最後に2015年以降もESDが進む仕組みとして、それぞれが進めているESDを大きな一つのESD推進の支援をするためのネットワークとしてつなぎ、さらに、民間の力と協力しながら進めるコアとなるESDを推進する組織、もしくはセンター、もしくはネットワークを作るために働きかけている。2014年、2015年に向けて、これからも情報発信をしていくので一緒に考えて行きたいと最後に締めくくった。



4. 環境省 環境教育推進室 木邑 優子、山品 加奈子

【木邑氏】

木邑氏は、ESD世界会議に向けて、環境省が行っている取組を紹介した。

環境省はESDの視点を環境教育に取り入れた授業を推進している。ESD世界会議は国連ESDの10年の最終年である2014年開催される。このESDの10年は2005年に始まった。ESD世界会議について、主催はユネスコと日本政府、環境省や文部科学省、外務省、内閣府をはじめ各省庁11省庁で開催する。日程は岡山県岡山市で11月4日～8日、愛知県名古屋市で11月10日～12日に開催される。目的は日本を始めとした世界各国における国連ESDの10年の活動をふりかえり、そして2015年以降のESD推進方策について議論し、ESDのさらなる発展を目指すことにある。この世界会議をESDのターニングポイントとして、一層ESDの事業の取り組みを環境省で進めていきたいと考えを述べた。

【山品氏】

山品氏は、上記の木邑氏の話を受けて、環境省の2つの取組を紹介した。

1つ目は人材育成事業について挙げた。これは、持続可能な地域作りには、優良な環境教育プログラムを通じた人材育成活動が必要不可欠なため、2013年度から開始した事業である。内容はESDの実

践で、全国47都道府県でESDの視点を取り入れた環境教育プログラムの作成・実施を行うものである。全国から環境教育プログラムを20個公募し、その中から疑似プログラムを選定、それをもとに小中学生向けのESDの視点を取り入れたモデル的な環境教育プログラムを作成する。第二段階として、モデル的なESDプログラムを全国47都道府県において、さらに地域性を盛り込み、プログラムを改良し、ワークショップなどを開いてプログラムの周知やESDや世界会議のことなどについて普及啓発を行っている。最終段階では、教育現場での実証である。全国47都道府県において、20のプログラムの中から選択してもらい、これに地元ならではの要素とESDの視点を取り入れ、環境教育プログラムを作成して主に学校現場などで実施している。

2つ目は+ESDプロジェクトについて紹介した。

ESDの活動の推進という目的で、個々の活動を見えやすくして、活動者同士をつなげる手助けする。地球環境や地域社会の問題を解決することを目指すプロジェクトである。

これに関してWEBサイトの運営の他に、まなびあいフォーラムの開催がある。そして、2014年2月22日には東京の丸ビルにて、子どもたちの環境活動の取組やESDの活動について報告発表し、みんなで共有する場となる、ESDキッズフェスがあると紹介をした。

【木邑氏】

最後に、木邑氏は、環境省の取組への協力のお願いと、環境省は2014年11月のESD世界会議に向け、ESDの視点を取り入れた環境教育の事業を加速して推進していくこと、そして、ESD世界会議をきっかけにそれぞれの活動がつながりの中で、最終年である10年目を盛り上げ、2014年以降のESDがますます発展していくようにしたいと述べた。



5. NPO 法人自然体験活動推進協議会(CONE) 安藤 伸彌

自然体験活動の指導者資格制度を2つ紹介いただいた。

まずCONEについて、説明を行った。全国の自然学校や環境教育を行っている団体が約300弱加盟している、自然体験活動の推進を行っている全国協議会である。主に指導者の養成などを行っている。

今回は自然体験活動指導者認定制度、通称NEAL(Nature Experience Activity Leader)についてと安全管理者についての認定制度・リスクマネージャーについて紹介いただいた。

始めに、NEALという新しい自然体験活動指導者の資格制度について紹介した。これまで、CONEは民間の自然学校が中心になって指導者の登録制度を作成してきたが、伸び悩みや国立の施設は関わっていないということがあった。このような様々な事情があり、国立の青少年施設を担っている独立行政法人国立青少年教育進行機構と連携協力する形で新しい指導者制度を作ることとなった。これがNEALである。

これまで、民間が主であったものをナショナルスタンダードとしての資格付与制度にしていくという流れである。しかし、これまでと比較すると公的な資格となるが、国家資格でない。NEALを作った背景としては、体験が非常に重要でそのためには指導者を養成していく必要があったためであり、さらに自然体験活動推進法を来年に向けて作っていくための裏付けとなる指導者制度とするためである。

NEALはCONEの指導者制度をベースにしており、CONE事務局は現存する。ただし、CONEの指導者制度が新しいNEALの指導者制度になるということである。基本的な構造は同じであり、今後、他の

活動も含めていきたいという構想がある。講習内容は、時間が22.5時間になり、概論と演習を行うことになる。これまでのCONE体験の指導者が、NEALの指導者へ移行する条件としては、CONEの指導者登録が有効であることと2科目受講する必要がある。

次に、リスクマネージャーについて紹介を行った。

組織の安全管理の担当者や野外活動も安全管理を非常に問われるため、CONEとしてリスクマネージャーを養成していく。組織の担当者として行うべきことをきちんと行っていただくということでこれも資格制度にしている。

背景として社会的に求められており、安全管理の担当者を各団体に1名置くことを目指している。現在、養成研修会では、内容について勉強し、検定に合格後、申請の上でリスクマネージャーとして認められる。CONEでは、3段階の安全管理の講習を用意しており、初心者向けの3時間のものから、現場担当者向け、そして組織担当者向けのものまでである。



6. NPO 法人日本エコツーリズムセンター 森 高一

まず、始めにNPO法人日本エコツーリズムセンター(以下、エコセン)についての説明を行った。エコツーリズムの第一線で活躍する実践者、研究者が結集した日本初の全国ネットワークである。2007年8月に設立し、2008年にNPO法人となった。

次にエコツーリズムの定義について話された。エコセンでの定義は、「地域を重視。特色ある自然文化、暮らしへの理解を深める旅行、交流活動というのを大事にし、地域の環境保全や産業振興につながるしくみを作ろう」である。エコセンでは、日本の地域を重視した活動を行っている。

地域に人が集まる場づくり、地域にあるものを再発見、人と人とのつながりを新たに築く、というところを主として、講演会、シンポジウムガイドの養成講習会、コーディネーターの講習会、災害系救援活動、エコツアーカフェなども実施している。最近では、野生生物との共生を探るものや、刃物に注目した取り組みも行っている。エコセンネットワークは百数名の世話人がいるので、世話人と共に日本の地域の問題や獣や刃物のような、様々なテーマをどんどん社会に発信していくのがエコセンの主旨である。

メッセージとしては、清里ミーティングのような場に来て欲しいということであった。ここでは、日本の地域の問題を深く切り取っていると思うので、こういう場で関係者の方々に話を聞き、ディスカッションをするということをぜひ体験して欲しいと語った。



7. 公益社団法人日本環境教育フォーラム 瀬尾 隆史

今回、初参加者が61%であったため、JEEFについて説明を始めた。 “JEEFとは環境教育に関わる人達をつなぐことによって、持続可能な社会作りを目指すネットワーク組織。いろいろな関係者を JEEF が間に立って取り次ぐことが最大の役割” であると JEEF について説明した。この言葉に関係する具体的な例となることを2つ紹介した。

1つ目は、環境省から受託している、エコツーリズムガイド育成事業を挙げた。JEEF が環境省から受託をし、各地の自然学校系の NGO に依頼し、実習をしてもらい、終了した段階で、自然系の NGO の職員や指導者になれるというプログラムである。この事業を行うためには、各地の現場で実際にやっている NGO との深いつながりが必要である。そのようなネットワークがなくてはならない。中央官庁と現場の NGO それに学生や自然に志がある人をつなぐのが JEEF の役割であると考えている。

2つ目は、生物多様性保全に関するプロジェクトである、SAVA JAPAN プロジェクトを例に挙げた。企業の損保ジャパンから日本 NPO センターが元受けとなり、47 都道府県の内、7 県を JEEF で受けているプロジェクトである。各地の NGO と共に、それぞれの生物多様性保全活動を、市民などに声を掛けて現場で活動を行ってもらう。このようなことを実施するのが JEEF の役割である。

続いて、最近のトピックスを紹介した。

1 番目は、シニア自然大学の動きについてであった。このようなシニアの教育は、大阪が先駆者であり、20 年、シニア自然大学校を行っている。その後、愛知の東海自然学園でも10年間実施していた。最近、神奈川、千葉でも開始し、2013 年から東京と埼玉でも各 NGO が行っている。東京は JEEF が行っており、この動きを更に各地で加速したいと考えている。そこで、北海道や九州で、シニアの自然大学的なものを作っていただけると有り難いと述べ、2013 年6月にシニア自然大学姉妹校連絡会を発足し、動きを加速していると考えていると話した。



2 番目は、7月にスタートした、企業懇談会に関してである。企業の環境 CSR 担当が色々な悩みを相談する場にしたということからスタートしたものである。事例発表がメインとなり、経験交流をして悩みの解決を図るという意図である。第2回目は2014年1月27日に NEC の品川で開催する。

3 番目は、ジャパン GEMS センターに関してである。GEMS は、カリフォルニア大学で開発され、子供を対象とした科学と数学の参加体験型プログラムである。一見、環境教育との関係が見えにくいだが、シナジー効果が期待して、2000年に GEMS が JEEF の中に設置した。2013 年から体制を強化するため、新しい人材を採用しこの事業を実施している。

最後に、JEEF が環境省から受託をした ESD キッズフェス事業に関しての話を2つ話した。

1つ目は、2月22日に全国の小中学生が取り組んだ環境保全活動や体験活動や様々な ESD 活動を発表してもらうため募集しているので、協力をしていただきたいこと。2つ目は、実際に2月22日にイベントに来ていただき、発表をしていただきたいと述べた。

8. ジャパン GEMS センター 柴原 みどり、高木 幹夫

【柴原氏】

GEMS とは日本語で、科学と数学の偉大な冒険である。ここ10年フォーラムをベースに全国で体験型の科学と数学のプログラムを展開してきており、

環境教育とのシナジーをすごく感じており、これからも深めていく。2013 年は体制を強化し、研究部門を作った。体験学習は子供たちが受けると素晴らしいが、実際にどのような効果があるのか、それを数値化することはできるのか、アセスメントの評価の部分をどのようにすれば良いかを研究している。

【高木氏】

高木氏は、UCLA、USC 南カリフォルニア大学からの特別なゲストを紹介した。GEMS センター内でも、体験型のワークショップの評価の方法に関して、模索をしていた。

そこで、アメリカを探ってみたところ、GEMS 自身が評価法を持っていることがわかった。そして、Eva 氏の所属している研究所、クレストでは、子どもたちがどの程度伸びるのかを評価法を持ち、評価法が正確であるということを外部評価した。そこで、体験学習における評価の研究を共同で実施することになった。

高木氏の紹介の後、Eva 氏と Harry 氏から一言ずつ、コメントをいただいた。

Eva L. Baker 氏：全米教育心理学会会長、世界教育心理学会会長を歴任。全米アカデミーでもある。UCLA の教授、CRESST 代表を務めている。

Harry O'Neil 氏：南カリフォルニア大学の教授。認知心理学の側面から評価に対して非常に様々な提案を頂いている。

【Eva L. Baker 氏】

Eva 氏は、3時間ワークショップを実施しての感想を、生き生きとしたワークショップになった。色々な質問が活発に出ており、参加者の皆さんがとても良い仕事に取り組んでいるということが分かり、嬉しく感じたと述べた。

【Harry O'Neil】

ワークショップで学校のような組織ではなく、非公式な学びの場での評価について話し、たくさんの方が興味を持ったことが印象的であると述べた。



【高木氏】

今後、ずっと共同研究行けると嬉しい。そして、参加者の皆と共に、体験で学ぶことをどのように伝えて行けば良いのかを模索したい。Eva 氏の話の中で、1つのものを学ぶということが対象ではなく、学んだことを次の学びに転移していく、という話がされた。実感としてあることをどう表現することができ、伝えることができるのかということを中心に大きな絵を描きながら進めていきたい。そして、GEMS そのものに興味と関心を持ってもらいたい。実施者として、GEMS のワークショップは様々なものに転移していく力がある進学塾が GEMS を使っており、転移はどのように起きるのかということに少しでも興味を持ったら、GEMS のプログラムに参加して欲しい。ジャパン GEMS センターでは、様々なプログラム、リーダーズワークショップを含め、GEMS カフェという GEMS を一緒に味わえるようになっている。ぜひ、GEMS をみなさん力での理解をいただき、広げていきたいと考えていると述べた。



オプションプログラム

◆10分プレゼンテーション 1日目:11月16日(土) 16:20~18:30

◆早朝ワークショップ

2日目:11月17日(日) 7:00~8:00

- アイソ彗星いつ観るか…清里、清んだ空…今でしょ! ※AM4:00~
- ロシアからの旅人に会おう
- 清里トレラン

3日目:11月18日(月) 7:00~8:00

- ポールラッシュ記念センター 特別ツアー

◆当日募集ワークショップ 3日目:11月18日(月) 9:00~11:30

- 全体会3 閉会式をプロデュース
- ソーシャルなビジネス作りワークショップ
- 無為自然に過ごそう
- 環境教育をカードゲームで考えてみよう~エネルギー編
- ユースが語るストーリーテリング ESD
- あなたにもできる CM づくりワークショップ
- 過疎の村を救え! ~もしも 100万円があったなら
- ねんどでイルカをつくろう! in 清里
- 小学校で環境教育をやりたい人 集まれ! 延長戦
- R30 アールサンジュウ
- 狩猟×環境教育を考えませんか?
- 福島で環境教育やらない?
- 油BAR ~搾りたての油、味わってみませんか?~
- ESDコーディネーター映像教材をつくろう!!

◆特別企画 1日目(16日) 21:00~22:00、2日目(17日)12:00~13:30

- アクアマリンふくしま移動水族館

◆自主企画

- プレゼンテーションで世界を変える! ~TEDの世界~
- 野外フェスは環境教育のツールになりえるか!?
- スマホ、テレビゲームの年齢制限でも考えてみよう
- JEEF 理事バンド

環境教育プレゼンテーション 1日目(16日) 16:30~18:30

①16:30~

◆ソローの山「クタードン」に登ってみた

実施者： 柴崎 文一 (明治大学/政治経済学部)

内容： 『メインの森』の記者・小野和人氏は、同書の「あとがき」で、かつてアメリカに滞在した際、近くの町からクタードンの山麓まで行き、途中まで登ってみたが、天候が悪くなって来たため、登頂はあきらめたとの記述を残している。この記述の様子から、かつてソローが苦心の末に登頂を果たしたクタードンも、現代ではそれほど難しいことではないのかと思いきや、実際にはとても危険なところだったという話をした。

◆企業とNGOとの協働による生物多様性保全

実施者： 松本 邦康 (経団連自然保護協議会)

内容： 1992年に開催された地球サミット(於リオデジャネイロ)を転換期として、企業はその事業活動が自然や生態系と密接に関わっていることを認識し、持続可能性のある企業活動とは何かを考えるようになった。経団連自然保護協議会は環境経営に熱心な企業により21年前に設立、同時に自然保護活動を助成する経団連自然保護基金が創設された。基金と協議会の活動事例を中心に、企業の自然保護活動と期待役割を共有した。

◆「都市型環境教育」が、地球の未来を変える！

実施者： 小西 康雄、相良 香子、丸山 瑛奈、鈴木 創 (東京ガス(株)環境エネルギー館)

内容： 東京ガス(株)環境エネルギー館は京浜工業地帯に位置し、ハンズ・オン展示物や各種プログラム実施の他、田んぼや屋上ビオトープでの自然体験も可能な施設である。身近な素材を通じて地球上の様々な環境やエネルギー問題を理解し、「自ら考え行動できる人」を育てることに取組んできた。今年度で閉館するが、地域連携そして日常の生活体験を通して学ぶ都市型環境教育施設として、15年間培ってきた取組みについて紹介した。

◆学校と地域をつなぐESDとコーディネーターの役割

実施者： 坪松 美紗 (立教大学異文化コミュニケーション研究科)

内容： 「ESDの視点から見る、学校と地域の連携協働体制」の研究発表をした。1つの学校の取り組みから見えてきた、学校と地域をつなぐESDと、そこに携わる地域コーディネーターの役割と意義を研究している。また、今話題のKP法でプレゼンをした。

②16:45~

◆EJで知らないと大損。自然のサイクルを表す「月暦」

実施者： 齊藤 透 (月の会<東京>)

内容： 思考が暦に規定されている。今の日本は、太陽暦(西暦)しか知らない方ばかりのため、明るさ・強さを是とする太陽中心文化である。大量消費、経済効率性最優先に？を投げかけるなら、別のモノサシも知ることの提案を行った。水と生命のサイクルを表す月暦。知らないからオカルト的に見えるが、科学性は太陽暦と同等以上。科学・文化・歴史・風土、万事につながっている。ファッションの小ネタの宝庫でもある。せっかくなら環境に携わるなら、「西暦Only」じゃもったいない。

◆エコ×エネ体験プロジェクト

実施者： 南 栄助 (J-POWER 電源開発株式会社)

内容： 人々の心豊かな暮らしは、エネルギーと自然環境に支えられている。

限りあるエネルギー資源と自然の恵みを有効に活用し、社会が持続可能な発展を遂げていくためには、エネルギーと自然環境を相反する存在ではなく“つながり”として捉え、どちらも大切にすると技術を育てることが必要である。

J-POWERは、持続可能な社会を目指す方々と協働して「水力編ツアー」及び「火力編ツアー」を行っている。

◆那須平成の森 来館者事例～シニア層対応～

実施者： 矢吹 陽子（公益財団法人キープ協会（那須平成の森））

内容： 「那須平成の森」の来館者層は、年間を通してシニア層がほとんどを占めている。例えば、カウンターでの対応、プログラム内容、リスクマネジメント、その他ちょっとした事にもシニア層ならではの配慮が必要となる。その事例と対応、職員の奮闘を紹介した。

◆学校における移動水族館の開催について

実施者： 古川 健（公益財団法人ふくしま海洋科学館）

内容： アクアマリンふくしまでは、平成15年より移動水族館専用車（アクアラバン）による移動水族館を開催している。移動水族館は、学校や社会教育施設で行う教育普及が目的のものと、イベント会場など広報宣伝を目的に実施するものがある。教育普及目的で実施する場合には、アクアラバンでの生物の観察の他に標本や剥製に触るハンズオンや生きもの実験なども合わせて実施している。今回は、学校での移動水族館の実施内容について報告した。

③17:00～

◆「決別！倍率神話」双眼鏡・天体望遠鏡 購入選定ナビ

実施者： 中村 照夫（月の会＜東京＞）

内容： 海外で許されない高倍率光学機器引っかけフレーズ超高倍率強調広告。芽生えた興味も「こんなもんか！」と終わり。粗悪品に出会う確率、良品の1000倍。良心的メーカーでさえも現状無視でさず自ら高倍率品もラインナップ。初心者へこそ基本的良品を最初に手渡すことこそが将来の上位品販売へとつながるのに。こんな野放し状況下でその天文人口の圧倒的少なさ、経済優先、天体・地球で暮らしていることを忘れかけた日本。

◆里山再生に向けた取り組み～ろうきん森の学校の歩み～

実施者： 小原 賢二（ホールアース自然学校）

内容： 富士山の麓「富士宮」にて活動を行っている、ホールアース自然学校の「ろうきん森の学校」を中心とした取り組みを紹介した。

「放置された人工林の間伐と材の活用」「竹林の伐採と竹の活用」「猟師の技術向上勉強会、ジビエ料理教室、皮や角を活かしたクラフト体験等の獣害対策」「ノルディックウォーキングやアロマを取り入れた森を活かした健康増進活動」様々な側面から、森を守り、活かす活動に取り組んでいる事例を紹介した。

◆地域に根ざした環境教育（PBE）を組み立てる

実施者： 水村 賢治、大前 純一（NPO法人エコプラス）

内容： 地域に根ざしたという言葉が、環境教育の分野でも聞かれるようになった。国際的には、“Place-Based Education”や“Traditional Knowledge”などという概念も広がっている。自然に親しむ環境教育が次に目指す、持続可能な社会づくりにむけて、いまだどのような取り組みが必要になってきているのか。何のための環境教育かという根っこを考えた。

◆小学校の八ヶ岳移動教室における清里での探究的活動

実施者： 佐藤 敬一（東京農工大学）

内容： 東京都多摩市東落合小学校5年生は2泊3日の八ヶ岳移動教室を行っている。2012年度は総合的な学習の時間として事前調査、清里での現地調査、事後の調査・まとめ・発表を行い、効果的な探究活動を検討した。児童は人間KJ法により、森・水・植物・酪農・動物の種類・水生生物・ヤマネ・鳥の8班に分かれ、体験型環境教育も含め事前学習し、清里では班ごとに行動し、整理とまとめを行い、展示ポスターとスライドショーで発表した。

④17:25～

◆トヨタの森式、ムササビを100%見せる工夫とは？！

実施者： 河合 智佳子、杉山 時雄、伊吹 あゆみ（トヨタの森）

内容： トヨタの森では観察会で100%ムササビを見せたいという思いの元、長い試行錯誤の末たどり着いた、アイデアを発案者が直々に伝授した。どこのフィールドでも活用できるので、ムササビのテーマで環境教育をしたい方向けの発表であった。またムササビクイズ、観察時の注意点、そして全3回にわたるイベント『ムササビプロジェクト』の取組みを紹介した。

◆地球環境基金の紹介

実施者： 崎枝 京子（独立行政法人環境再生保全機構 地球環境基金部）

内容： 地球環境基金は、1993年の創設以来、日本国内外の環境保全活動に取り組む民間団体へ活動支援を行っている。今年度は、創設20周年を迎え、これまでの地球環境基金の取り組みと今後の地球環境基金のあり方を紹介した。

◆見せます！柏崎・夢の森公園の最新展示&グラフィック

実施者： 久松 信介、小池 梓、和久井 詳子（柏崎・夢の森公園管理事務所）

内容： この1年で手がけた「ビジュアルコミュニケーション（※）」を活用したグラフィック（板書）や、施設展示を紹介した。製作者自ら、作成におけるこだわりや大切にしていること視点を話した。（※：会議や公園の場面で、絵や文字を使って視覚的に表現する板書技術のこと）

◆高校生向け環境教育プログラムの事例報告

実施者： 白杵 裕之（公益社団法人日本環境教育フォーラム）

内容： アサヒビール（株）及び（公社）日本環境教育フォーラムでは、高校生を対象とした「日本の環境を守る若武者育成塾」を実施している。本事業は、「地元の環境問題を何とかしたい！」そんな想いを抱く高校生を対象に、合宿での体験学習、地域での活動計画づくり、計画の実行、成果発表会を通じて、「自ら考え、行動する」志の高い高校生＝若武者の育成を目指す環境教育プログラムである。プレゼンテーションでは、本年度の成果について発表した。

⑤17：40～

◆昆虫採集から環境教育を考える

実施者： 須田 淳（一般財団法人自然公園財団箱根支部）

内容： 我々にとって最も身近な生物である昆虫。気持ち悪い、害虫、というイメージが強い彼ら。しかし先入観のない子供たちにとっては最高の遊び相手である。好奇心、探究心、人とのつながりがどんどん産まれる昆虫採集。箱根ビジターセンターが開催している昆虫観察会での話を中心に、自然の入り口として最適である昆虫採集について話した。

◆IP思考でHappyを創りたい～街コン事例を中心に

実施者： 井上 健太郎（インタープリターズ・ユニット 森あそび本舗）

内容： 愛知で休日を利用してインタープリターをしている発表者が、色々な講習会を通じて皆さんにたくさんの刺激と学びと出会いを頂き活動をしている。今回は普段の活動の報告とともに、今後テーマのひとつにしたいと考えている「IP的思考・IP的手法を～に活かしてHappyを創る」という事について、街コンでプチ・フォトログイニング体験を実施した例を中心にご紹介した。

◆自然体験が参加者に及ぼす長期的影響

実施者： 後藤 瑛（立教大学異文化コミュニケーション研究科）

内容： 子どもの頃の自然体験で得たことは、成人してからも影響するのだろうか？キャンプのボランティアスタッフをしているうちに、こんな疑問を持った。徳島県吉野川で行われている自然体験活動「川の学校」の8～12年前の参加者に、アンケートとインタビューをして現在の自分に影響していることがあるか調べた。調査の報告を通して、参加者にとって学びの多い自然体験とはどのようなものか考える時間にした。

◆持続可能性を身につける、スウェーデンからの園庭指針

実施者： 石田 佳織（はぐくみ庭工房）

内容： スウェーデンウメオ市の「就学前学校の屋外環境指針」について話した。この指針では、環境や自然に配慮し、持続可能な考え方や暮らしを身につけるためには、幼児期に自然の楽しさを実感し体験の中でエコロジーを理解することが重要と捉え、そのために園庭をどう作っていくかが示されている。加えて、自分の考えを表現する力を持つこと・自分の行動や学校の環境に責任を持つこと・協同や意思決定に関わり民主主義を理解し行動に移すことが目指されている。

⑥17:40~

◆世界遺産「白神山地」での取り組み ～保全と利用～

実施者： 谷口 哲郎（岩木山自然学校）

内容： 今年、富士山が世界文化遺産に登録され、世界遺産が注目を浴びている。世界自然遺産である白神山地は遺産登録され、20年が経過し、さまざまな取り組みが行なわれている。今回は、白神山地を取り巻く最近の現状を「保全」と「利用」の両面から紹介し、私達が世遺産の中で取り組む環境教育や自然体験活動 などについても紹介した。

◆新たなつながりを生み出す！環境教育×まちづくり

実施者： 牧野 真弓（認定NPO法人 アサザ基金）

内容： 牛久市内の小中学校で行っている、環境教育の実践報告をした。自分の住んでいる場所の自然特性を理解し、生きものという他者の視点に立って、地域資源を探することで、子どもたちから「あたらしいまち」の提案が生まれてくる。そこに、地域の人々や企業の方々も加わって、大きなつながりを持ちはじめた。学校を中心とした、まちづくりの担い手を「地域ぐるみで育てる地域社会」を目指し、壮大な物語を紡いでいる最中の話をした。

◆電子絵本+環境教育プログラムとは？

実施者： 小堀 武信（公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF））

内容： JEEF では平成24年度から3カ年をかけて、「生物多様性と暮らし」をテーマに電子絵本を制作している。昨年度は「わたしはなあ〜に？」をウェブサイトで公開し、現在2作目の制作に取り掛かっている。参加者の皆さんに伺いのは、①どのように普及していけばいいのか、②環境教育プログラムの中で、どのように活用できるか（（独）環境再生保全機構地球環境基金助成事業）ということについて、アイデアをもらうように進化した。

◆「東京シニア自然大学」を考える

実施者： 林田 悦弘（公益社団法人日本環境教育フォーラム）

内容： 大阪から端を発したシニア向けの自然大学は現在首都圏では千葉、神奈川、埼玉、東京と4校開校している。今回は特に今年開校した「東京シニア自然大学」について、実際の運営担当者として参加者や講師からの「声」や、事業としてのメリット・デメリットなどを皆さんの意見を聞きながら考えた。

⑦18:10~

◆森のお手入れ×コミュニティ再生=コミもり

実施者： 木村 恵巳（NPO法人ねおす）

内容： 『コミもり』とは、「コミュニティ」と「森」を合わせた言葉である。その目的は、森のお手入れという手法を活用して「コミュニティ再生」を達成すること。コミもりでは、林業従事者ではない一般の人が草刈りや枯れ枝の切り出しなどの森のお手入れに関わっている。同時に森のカフェやきのこ狩り、子どもの遊び場づくりを通して「森のコミュニティーセンター」の役割を担っている。北海道での「コミもり」の取組を紹介した。

◆必見！の映像教材～地域のコーディネーターを目指す人へ

実施者： 森 高一（立教大学大学院）、村上 千里（ESD-J）

内容： ESD-Jは最近 YOUTUBE に映像教材を公開している、多様な主体が連携した教育活動や持続的な地域づくりを進めていくには、コーディネーターの役割がとても重要である。そこで、ESD-Jでは、ESDの視点を持ったコーディネーター力を高める研修と教材の開発に取り組んでいる。好きな時間に、好きな場所で、気になったテーマをクリックすると、1本5分で1テーマを見ることができる映像教材を紹介した。

◆ESDと震災 ―自然との対話編

実施者： 長岡 素彦（ESD学校教育研究会）

内容： 東日本大震災によって、私たちは、生死・生き方、社会のあり方、自然・災害、科学技術・原子力の問直しを迫られた。私は震災支援をしながら、東日本大震災以降のESDのあり方を検討し、東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）現地会議・避難者会議、ESD学校教育研究会のESDと復興に関する東北での調査・論議、復興とESDコーディネーションの検討などを行った。このことを共有し、論議した。

早朝ワークショップ

2日目(17日) 7:00~8:00

◆アイソン彗星いつ観るか…清里、済んだ空…今でしょ！

実施者：齊藤 透・中村 照夫（月の会<東京>）

太陽に接近中のアイソン彗星を澄んだ清里の空の中で観察しようという主旨のワークショップ。17日50名参加。生憎の曇。30分程、星の見方、ゲンコツ一つ10度などの話をしつつ待つも晴れず。翌朝も開催を期して散会。18日、前日よりひどい霧で集まった方は5名。30分程話をしつつ待つも晴れず断念。しかし、撤収作業中に霧が晴れ、東の空約20度の高さに水星（滅多に見られない）、東南東約30度の高さにスピカ、その少し上にアイソン彗星を、実施者2名が確認した。
(参加者数：29名※17日)



◆ロシアからの旅人に会おう

実施者：安西 英明（日本野鳥の会 主任研究員）

本ワークショップでは、日本野鳥の会の安西英明主任研究員の解説のもと、早朝にバードウォッチングを行った。テーマは「ロシアからの旅人に会おう」。

この時期にロシアから日本へ飛来する鳥たちの観察をするとともに、鳥たちの暮らしについて、そして植物の種子の「四つの作戦」についての話、それに伴う植物の種さがしなどを行った。安西氏いわく、バードウォッチングに必要とされることは「考える頭と感じる心」。いくら生き物がそこにいても見ようとする心がない限りは何であっても見えないと話した。

(参加者数：20名程)



◆清里トレイルラン

実施者：松村 正道（木暮人倶楽部）

準備運動を終え、向かったのは森の中を通る高低差約150mほどのサイクリングロード。カラマツの黄葉が残り、時おり鳥の声が聞こえる朝の森を駆け上がった。

走る前は冷えていた体も心拍数が上がり、汗ばみ、上着を脱いでしまいたいくらい暖かくなった。八ヶ岳高原ラインまで登りきり、降りには森の中へ。体を思い切り動かしながら、冬の森の寒さと暖かさを感じながら過ごすことができた。

(参加者数：10名)



◆ポール・ラッシュ記念センター 特別ツアー

実施者：秦 英水子（公財）キープ協会）

博物館の学芸員が、センター内を特別に案内した。最初にポール・ラッシュ博士が次世代のリーダーを育てる研修施設として、設立をした清泉寮について説明をした。そして、博士が目標にしていたことや、KEEPがどのようにデザインをされたかについて知ることができた。

博士が生前過ごしたお部屋の紹介やバックヤードの裏話など、学芸員がいるからこそ見たり、聞いたりすることができる特別プログラムとなった。

(参加者数：8名程)



当日募集ワークショップ

3 日目(18 日) 9:00~11:30

◆全体会 3 閉会式をプロデュース

実施者：森 高一(立教大学大学院)
山田 俊行(トヨタ白川郷自然学校)

清里ミーティングの最後を飾る全体会閉会式の企画運営を行うワークショップである。参加者の経験をもとにブレインストーミングをし、ディスカッションを行った。その中で、野外に出てアクティビティを行うという方向にまとまり、実際に屋外に出て話し合いを続けた。結局、「清里の場を味わう」をコンセプトとして、特に規則は定めず、外で自由に交流を行う会とすることでまとまった。

(参加者数：8名)



◆ソーシャルなビジネス作りワークショップ

実施者：谷口 哲郎(岩木山自然学校)
木村 直樹
田之下 雅之(㈱Tクラフト・プラス)

最初に参加者同士の自己紹介とともにお互いの問題意識の共有を図った。その後、田之下氏から具体的な企業や自治体との協働事例などを交え発表があった。谷口氏からは白神山世界遺産センターでの実践の紹介がされた。従来型の見ただけの「観光」から、体験プログラムの提供によるエコツアーへの転換がソーシャルビジネスとしての可能性として示された。紹介された2つの事例に触れる中で本ワークショップが参加者の新たな気づきの場となった。

(参加者数：8名)



◆無為自然に過ごそう

実施者：猪俣 寛(公益財団法人日本野鳥の会)

老荘思想である「無為自然」を体現すべく、屋外へ出て森の中を散策した。自分の中の自然と周りの自然をシンクロさせることで道が見えていくのでは?というところから、各々が「今の時間」を大切にしながら自由に歩き、皆で瞑想するなど静かな時間を過ごした。森の奥ではあえて誰とも話さない一人の時間をもうけ、思い思いに感じたことを書き記した。3日間のミーティングの喧騒から少し離れて自分と向き合った、貴重な時間となった。

(参加者数：5名)



◆環境教育をカードゲームで考えてみよう～エネルギー編

実施者：藤木 勇光・小林 庸一・南 栄助
(J-POWER 電源開発株式会社)

小寺 昭彦(サイエンスカクテル)
平塚 雅人(東京農工大学)

4つのグループに分かれ、国となり、一国の大臣となって理想のエネルギー・環境政策を目指す。電気料金・環境負荷・稼働率・自給率をキーワードに水力、火力や原子力など様々な種類の中から発電所カードを選ぶ。国がもともと持っている資源や経済力など、条件の違いに応じて、発電所の種類の組み合わせをグループで話し合っ

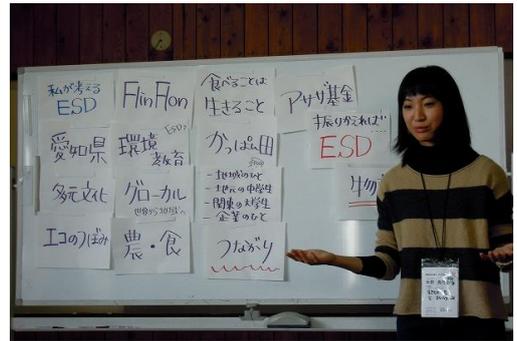


◆ユースが語るストーリーテリング ESD

実施者：牧野 真弓（認定 NPO 法人 アサザ基金）
坪松 美紗（立教大学院異文化コミュニケーション研究科）
金子 直裕（企業組合労協センター 大崎地域福祉事業部）
& ESD-J（サポートとして2名）

KP 法と、参加体験のディスカッションによるプログラム。
まず、カードを用いて自己紹介のアイスブレイクをした。その後2名の実施者が自分史を KP 法で説明し、その経験から、ESD に対する考えを紹介した。同様に参加者も自分史を書き出し、共有した。また、それぞれ自分の考える ESD とはなにかを発表した。例として、すべての活動は ESD につながるということや、ESD に出会って社会のしくみを知るようになったという意見が挙げられた。

（参加者数：9名）



◆あなたにもできる CM づくりワークショップ

実施者：中西 紹一
（立教大学大学院異文化コミュニケーション科）

「清里の思い出」というテーマで、1分間のCMづくりを行った。参加者は5つのグループに分かれ、各グループごとに思い思いの場所で2枚の写真を撮影した。ただし写真の2枚目では、配られた厚紙とペンで描いたメッセージと一緒に撮影することとした。最後に10枚の写真に1分間の音楽を合わせ、CMが完成。WSの最後に参加者全員で鑑賞した。3日間の清里ミーティングを総括するような満足度の高い作品に仕上がった。

（参加者数：12名）



◆過疎の村を救え！～もしも100万円があったなら

実施者：高尾 康太（地域おこし協力隊）
立花 沙代香（王滝村役場）

人口900人、信号なし、コンビニなし、人なし、金なし... そんな王滝村を100万円でプロデュース！地域活性化に興味がある方が集まって、素敵なアイデアがどんどん出てきた。本ワークショップはアイスブレイク、自己紹介タイム、王滝村ってどんなところ、感想をひらめき共有、グループワーク、グループ発表、まとめという7つの部分で構成され、楽しい雰囲気の中に、皆が積極的に村のためにいろいろ助言した。

（参加者数：11名）



◆ねんどでイルカをつくろう！ in 清里

実施者：八木下 志麻
（国際イルカ・クジラ教育リサーチセンター
（アイサーチ・ジャパン））

実施者お手製の羊毛フェルトのイルカをお手本に、紙粘土を材料にして小さなイルカを作製した。実施者と参加者との懇談を交えつつ、和やかな雰囲気の中、それぞれに個性的な表情をもつイルカが完成した。私たち人間の生活と、イルカたちが暮らす海の世界は水で繋がっている。このイルカづくりには、私たちが森をまもることで海をまもることができるというメッセージが込められている。最後に封筒をリサイクルして作られた紙袋にイルカを入れて、ワークショップは終了した。

（参加者数：7名）



◆小学校で環境教育をやりたい人 集まれ！延長戦

実施者：佐藤 敬一(東京農工大学)

大石 智啓(東京農工大学農学部 佐藤研究室)

Project Learning Tree (PLT)というアメリカで開発された森林環境教育の考え方を軸に実施者が小学校などで行っている活動を紹介した。紹介後、参加者に実施者も混ざり、ディスカッションが行われた。ディスカッションでは実際に環境教育の現場に立っている参加者が多かったことからPLTが日本の環境教育に適しているのかというものや実際に環境教育をする難しさなど幅広い話題で具体的なものが多かった。

(参加者数：6名)



◆R30 アールサンジュウ

実施者：水村 賢治(特定非営利活動法人 ECOPLUS)

本ワークショップは、20代～30代と若い世代で環境教育に携わっている方が集まり話し合う時間となった。テーマは「若い世代はこれから何をすべきなのか」というものだった。若い世代だからこそ出来ること、若い世代がこれからやるべきこととして、様々な団体や人、大学と繋がりを作っていく必要があると話した。ネットワークを広げることで様々な環境教育に関する活動を行うことができると話し合いをした。

(参加者数：3名)



◆狩猟×環境教育を考えませんか？

実施者：松本 美乃里(ホールアース自然学校)

「狩猟」という切り口で「食べること」「伝えること」を考えることを目的に実施されたワークショップであった。「なぜこのワークショップに参加したのか(チェックイン)」「どんな肉を食べたことがあるか」「安全・安心な肉とは?」「狩猟って?」「『食べる』こととは?」のテーマでの議論・共有、そして、実施者から「ホールアース自然学校の狩猟に関する取り組み」「野生動物のこと」の紹介が行われた。

(参加者数：16名)



◆福島で環境教育やんない？

実施者：山崎 裕恭(伊達市地域おこし支援員)

東日本大震災で多大な被害を受けた上に、原発事故による影響を今も解消できていない福島の現状をふまえ、福島での環境教育の可能性を探る話し合いが行われた。今も福島にいる人だけでなく、福島を離れ避難生活をしている方や、外部から福島に来ている方などいろんな方がいて情報が偏っている。その人たちのネットワーク作りのきっかけとして(仮)福島ミーティングの開催や、イベント開催を通じて、福島での持続的な活動の重要性が話し合われ、今後の活動につなげていくことが提案された。

(参加者数：5名)



◆油 BAR ～搾りたての油、味わってみませんか？～

実施者：青木 麻耶（NPO 法人都留環境フォーラム）

小島 由美子

本ワークショップは、木の実油の知識を食べながら学び、和やかな雰囲気の中、理想のカフェやバーを考えよう！という企画だった。油搾り機「SHIBORO」で木の実を圧搾し、油を採る。それをパンに付けて食べると、木の実の香りが口に広がり、参加者を幸せにした。その後、理想のカフェやバーについて考え、発表し合った。キノコバーや狩りバーなど独創的なアイデアが多く出た。全員がワクワクしたワークショップだった。

（参加者数：10名）



◆ESD コーディネーター映像教材をつくろう！！

実施者：村上 千里（特定 NPO 法人 ESD-J）

浜本 奈鼓（特定 NPO 法人くすの木自然館）

本ワークショップでは、ESD コーディネーター育成のための映像教材作りに取り組んだ。既製の映像制作プランの中で、最も緊急性の高いテーマやさらに改善すべきテーマなど、映像制作に向け、参加者が多角的に意見を投じた。その議論を踏まえ、さまざまなフィールドで ESD や ESD コーディネーションに関わる活動に取り組む参加者が、それぞれ「私なりの ESD」を語り、1本の映像教材を作成した。

（参加者数：8名）



特別企画 1日目(16日) 21:00~22:00、2日目(17日) 12:00~13:30

アクアマリンふくしま移動水族館

実施者： 安田 純、古川 健、松崎 浩二、金城 美枝 (アクアマリンふくしま)

アクアマリンふくしまでは、今回の清里ミーティングにアクアラバン (移動水族館専用車) を運行した。アクアラバンには、サンゴ礁の海に生息する大きなイセエビの仲間や熱帯魚を展示した海の中を覗き込むに見ることができる水槽と、福島県沿岸に生息するウニやヒトデ、サメなど手に取ったり、観察できるタッチプールの2種類の水槽がある。

参加者が観覧できたのは、1日目の夜の情報交換会と2日目の昼休みの短い時間でした。しかし、多くの方が訪れ、興味深く観察していた。



自主企画

◆プレゼンテーションで世界を変える！～TEDの世界～

実施者： 柴崎 文一 (明治大学)、佐藤 敬一 (東京農工大学)

◆野外フェスは環境教育のツールになりえるか！？

実施者： 鈴木 幸一 (アースガーデン)

◆スマホ、テレビゲームの年齢制限でも考えてみよう

実施者： 齋藤 透 (月の会<東京>)

◆JEEF 理事バンド (バンド演奏)

実施者： 岡田 康彦(会長)・川嶋 直(常務理事)・小澤 紀美子(理事)・徳永 豊(理事)・
中野 民夫(理事)・松村 正道(元事務局長)・瀬尾 隆史(事務局長)

3 日目

全体会 3・閉会式

全体会3では、参加者全員が屋外の牧草地へ出た。今回は、ディスカッションなどではなく、ひたすら外で、一緒にいる人たちと清里ミーティングという場を楽しみ、感じた。

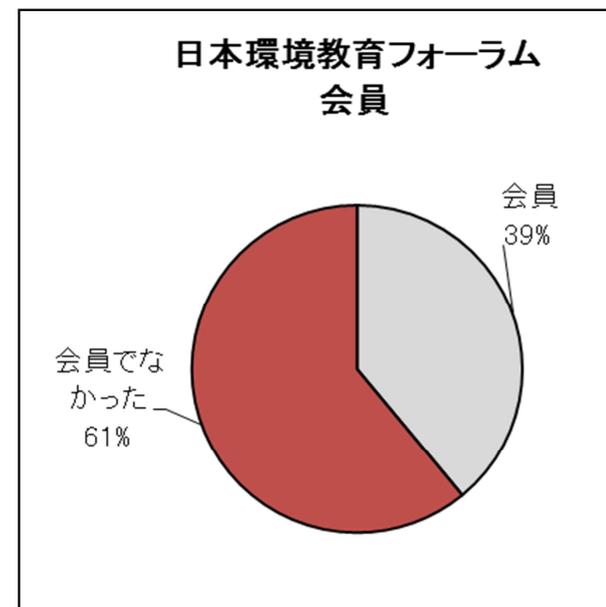
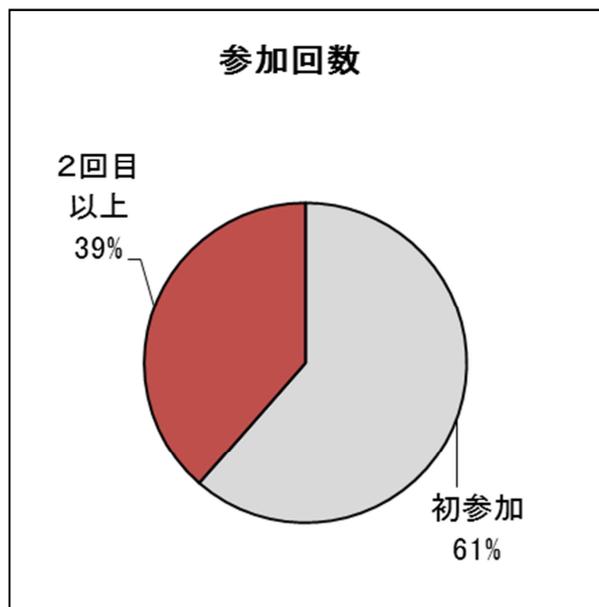
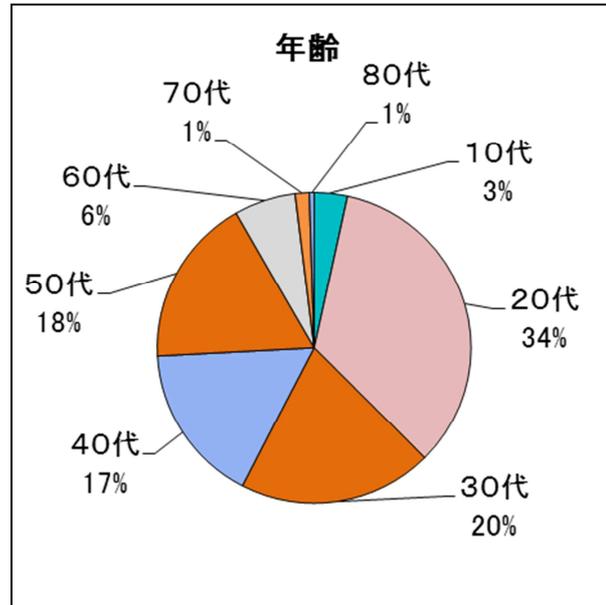
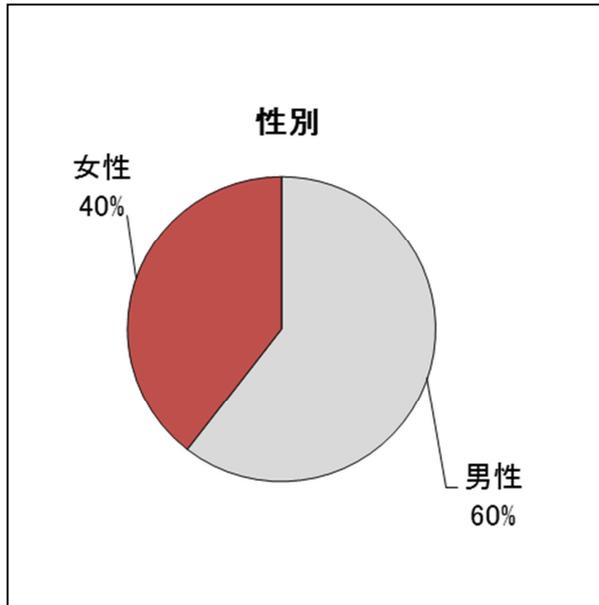
最初は、その場にいた参加者全員が1つの輪になると、改めて多くの方が参加していたことを感じさせられた。また、なんとなく集まったメンバーでそれぞれ時間を過ごすことになる、寝ころがるグループ、はないちもんめをするグループ、人間知恵の輪をしているグループなど、それぞれ過ごし方は違った。

今回の閉会式は、多様な人々が集まる清里ミーティングを象徴したような全体会・閉会式であった。



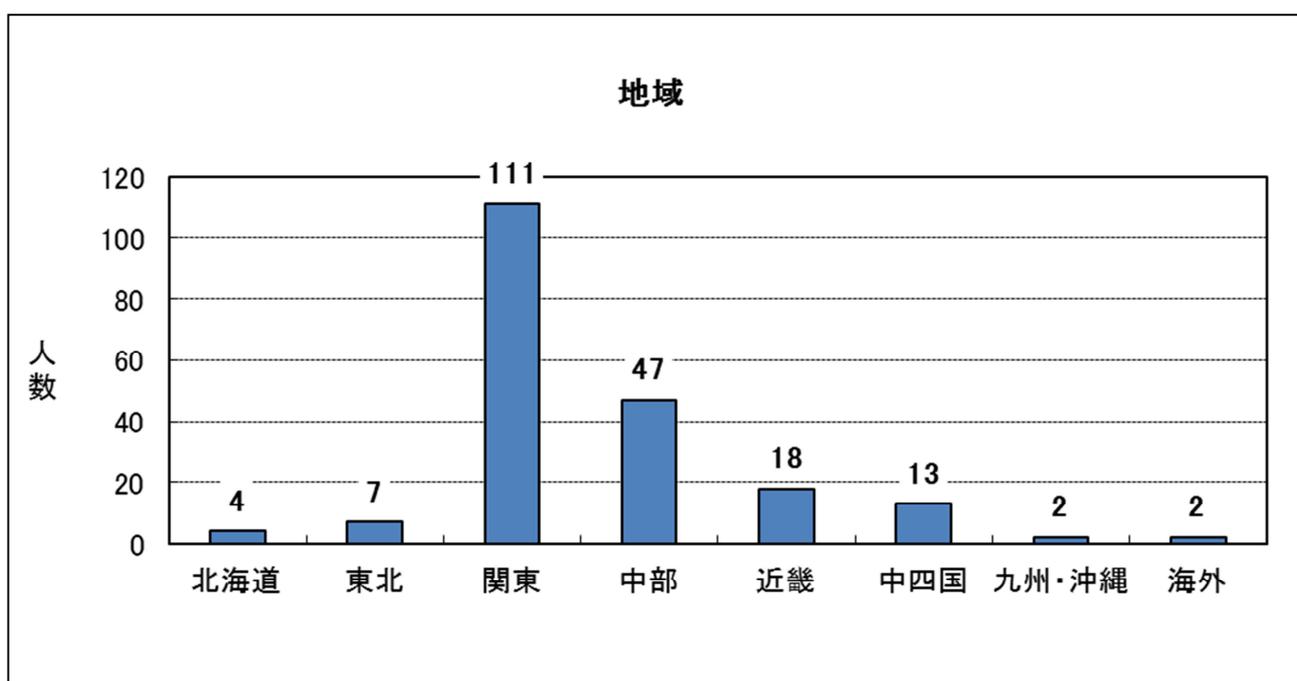
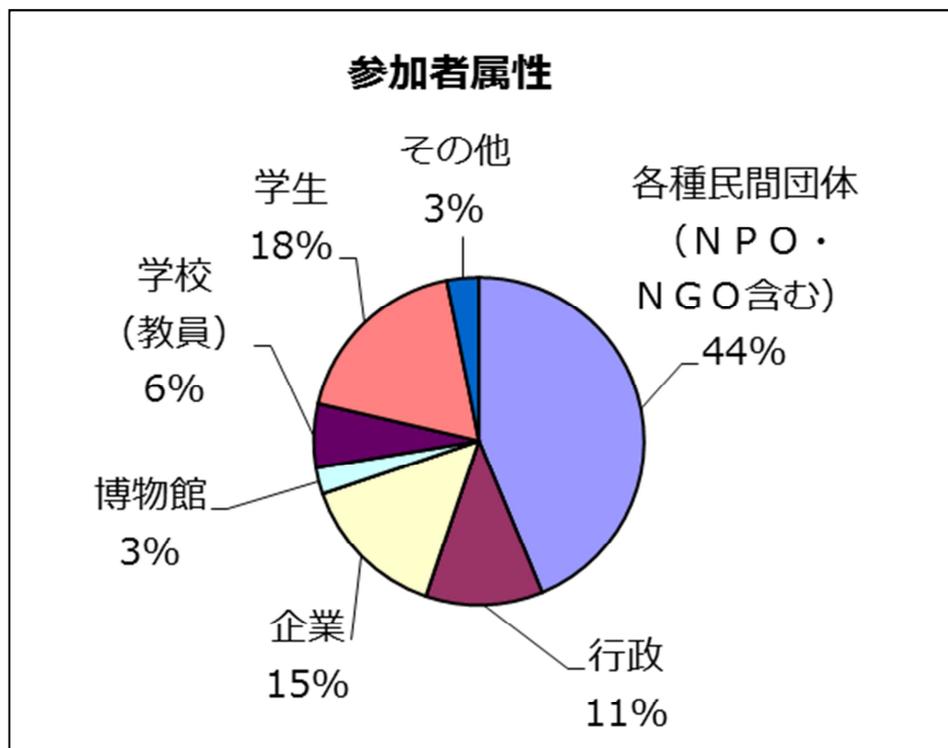
参加者データ

～データに見る清里ミーティング 2013～



参加者データ

～データに見る清里ミーティング 2013～



スタッフ名簿

氏名	所属
臼杵 裕之	(公社) 日本環境教育フォーラム
鴨川 光	ジャパン GEMS センター
京極 徹	(公社) 日本環境教育フォーラム
小堀 武信	(公社) 日本環境教育フォーラム
柴原 みどり	ジャパン GEMS センター
清水 清二	(公社) 日本環境教育フォーラム
林田 悦弘	(公社) 日本環境教育フォーラム
饗場 葉留果	(公財) キープ協会
家倉 舞	(公財) キープ協会
伊澤 菜美子	(公財) キープ協会
石川 千春	(公財) キープ協会
石川 昌稔	(公財) キープ協会
岩淵 真奈美	(公財) キープ協会
長田 侑	(公財) キープ協会
小野 明子	(公財) キープ協会
小野寺 浩詩	(公財) キープ協会
加藤 アミ	フリーランス
齋藤 薫	(公財) キープ協会
佐藤 陽介	(公財) キープ協会
関根 健吾	(公財) キープ協会
高木 恭子	(公財) キープ協会
竹越 のり子	(公財) キープ協会
鳥屋尾 健	(公財) キープ協会
中山 孝志	(公財) キープ協会
本田 晶	(公財) キープ協会
増田 直広	(公財) キープ協会
松尾 信子	(公財) キープ協会
湊 秋作	(公財) キープ協会
村山 敬洋	(公財) キープ協会
本杉 美記野	(公財) キープ協会

(50 音順)



清里ミーティングの仕掛け人

(公社) 日本環境教育フォーラム 常務理事 川嶋 直

ボランティアスタッフ名簿

氏名	所属
五十嵐 潤	無所属
伊倉 康太	一般社団法人アカデミーキャンプ
伊東 絵里子	大妻女子大学
伊藤 秀之	日本大学
祝 璃葉	東京農業大学 卒業
大久保 大地	立教大学
菊池 彩花	お茶の水女子大学
小島 早和	関西学院大学
関口 成美	立教大学
太刀川 みなみ	立教大学
中村 幹	立教大学
羽鳥 秀介	芝浦工業大学
治田 世以良	麻布大学
平野 初実	立教大学
符 瑞	桜美林大学
保坂 虹太郎	立教大学
柳川 真澄	関西学院大学

(50 音順)



清里ミーティング 2013 を支えてくれたスタッフの皆さん
ありがとうございました！！

清里ミーティング 2013 報告書

発行者：公益社団法人日本環境教育フォーラム

※この報告書および清里ミーティングに関するお問い合わせは下記まで。

〒160-0022

東京都新宿区新宿 5-10-15 ツインズ新宿ビル 4F

公益社団法人日本環境教育フォーラム

TEL:03-3350-6770 FAX:03-3350-7818

URL : <http://www.jeef.or.jp/>